



2002-2003 年度
TOEFL 教育者セミナーシリーズ報告書
-TOEFL-ITP 導入・利用事例集-
『変わる英語教育 ーその現状と課題ー』

国際教育交換協議会 (CIEE) 日本代表部
TOEFL 事業部



2002-2003年度 TOEFL 教育者セミナー報告書
「TOEFL-ITP導入・利用事例集」発行にあたって

CIEEでは、1981年より米国 Educational Testing Service(ETS)の委託を受け、国際標準の英語能力試験 TOEFL(Test of English as a Foreign Language)の代表日本事務局として、日本国内での TOEFL に関する情報提供、TOEFL プログラムの新しい利用のご提案などさまざまな広報活動を行っております。

TOEFL は英語圏への留学に必要な試験として認知されておりますが、昨今では、大学・高等学校など国内の教育現場において幅広く利用されております。全学的に統一テストとして TOEFL を採用される大学も増えており、高等教育のグローバル化に合わせて、活用の幅が広がりつつあります。

大学を始めとする国内教育団体への情報提供として 1997 年より継続して開催しております TOEFL-ITP セミナーは、2002 年 7 月 23 日に東京で 106 名の参加者を集め、国公立大学における先駆的な TOEFL の利用事例発表に大きな好評を得ました。

2002 年秋には、日米教育委員会と各地域の国際交流団体で共催される「アメリカ留学相談会」に TOEFL 説明会実施で協力させていただく機会を利用し、TOEFL 教育者セミナーシリーズとして全国展開し、札幌(10月11日)、大阪(10月18日)、福岡(10月25日)、名古屋(11月9日)の4都市において開催いたしました。

すべてのセミナー報告を統括する形で、教育改革の最前線に立たれる国公立学・高等学校の TOEFL 導入・利用事例集として、このたびまとめました。さまざまな立場において導入の経緯が異なっておりますし、英語教育をとりまく環境の違いで利用のされ方もさまざまです。変革を遂げている英語教育において TOEFL が一石を投じる役割を果たしていることを、そしてこのような事例をいくつかでも皆様にご提供することにより、皆様の情報収集に役立つことを当協議会としても心より願っております。

ご発表の先生方にはセミナーにてのご講演はもとより、ご多忙にもかかわらず原稿の修正を快くお引き受け下さったことを感謝いたしております。

また、セミナー開催につきましては(財)札幌国際プラザ、札幌アメリカン・センター、日米教育委員会、駐名古屋米国領事館、名古屋アメリカン・センター、(財)名古屋国際センター、(財)福岡県国際交流センター ことさいぷらざより多大なご協力をいただいたことをこの場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部
TOEFL 事業部本部長 兼 TOEFL 日本事務局長
高 田 幸 詩 朗

2002-2003 年度 TOEFL-ITP・教育者セミナー
TOEFL-ITP 導入/利用事例集 目次

I. 国立大学の部

I-1 北海道大学 言語文化部
単位認定としての利用事例

北海道大学言語文化部教授 竹本 幸博氏

I-2 東京医科歯科大学
プレイスメントテストとしての利用事例

東京医科歯科大学 教養部助教授 前沢 浩子 氏

I-3 横浜国立大学
新カリキュラムにおけるにおける統一テストとしての利用事例

横浜国立大学 教育人間科学部教授 高橋 邦年 氏

経営学部助教授 小林 正佳 氏

I-4 岐阜大学 医学部
医学部における英語の位置付けとしての利用事例

岐阜大学医学部 江崎孝行氏

II. 私立大学の部

II-1 中央大学 総合政策学部
必修講座履修要件としての利用事例

中央大学 総合政策学部助教授 黒田 絵美子 氏

II-2 関西学院大学
ランゲージ・プログラム・モニタリングのための ITP

関西学院大学 総合政策学部教授 Dr. Steven Ross

II-3 西南学院大学 文学部
プレイスメント/交換留学選抜テストとしての利用事例

西南学院大学 文学部教授 古屋 靖二氏

III. 高等学校の部

関西創価中学校・高等学校教諭 中西 均 氏

発表者紹介



竹本 幸博 (TAKEMOTO, Yukihiro)

1950年生まれ。

東北大学文学部、同修士課程修了、同大文学部助手、岐阜大学助教授を経て、現在、北海道大学言語文化部教授。

専門: 中世、近世英文学



前沢 浩子 (MAEZAWA, Hiroko)

1961年生まれ。

1989年津田塾大学大学院文学研究科博士課程を単位取得退学。

同年より東京医科歯科大学教養部にて英語を教えている。

専門はイギリス演劇。



高橋 邦年 (TAKAHASHI, Kunitoshi)

1951年 東京都生まれ。

筑波大学大学院博士課程満期退学。UC San Diego 大学院修士課程修了。

横浜国立大学教育人間科学部教授。

専門: 英語学、理論言語学

著書, 論文: 『アメリカ日常語辞典』(共著, 講談社), 『高校総合英語 Bloom』

(監修, 桐原書店), Some puzzles on VP ellipsis(『意味と形のインターフェイス』くろしお出版), 他



小林 正佳 (KOBAYASHI, Masayoshi)

1959年 神奈川県生まれ。

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科 単位修得退学(文学修士)

横浜国立大学大学院 国際社会科学研究科 助教授

専門: 社会言語学、語用論

近著(論文): 「ファミリーレストランにおけるコーヒーのおかわりの仕方

— 語用論の視点から —」『横浜経営研究』19巻1号

「発話行為としての依頼の理解と丁寧さにかかわるもの」『横浜経営研究』16巻3号



江崎 孝行 (EZAKI, Takayuki)

1951年熊本生まれ 岐阜大学医学部卒、最終学歴: 岐阜大学大学院博士課程

専門: 病原微生物学

大学院・再生医科学・微生物バイオインフォマティクス部門 教授

Bergy's manual international trustee, International Union of Microbiological Society:

医学英語 コーディネーター、医学部カリキュラム委員長



黒田 絵美子 (KURODA, Emiko)

東京女子大学大学院修士課程、青山学院大学大学院博士課程修了。

中央大学商学部専任講師を経て、総合政策学部創設当初より移籍。

現在、同学部助教授。専門は現代英米演劇。訳書にレイモンド・カーヴァー著『水の出会うところ』、『海の向こうから』(論創社)、テス・ギャラガー著『馬を愛した男』(中央公論社)、テレンス・マクナリー著『マスタークラス』(劇書房)。上演台本翻訳、ピーター・シェイファー『レティスとラベッジ』、ノエル・カワード『私生活』など。



Steven John Ross, Ph.D

Currently Professor at KGU

PhD in Second Language Acquisition (University of Hawaii)

Taught graduate courses in research methods and language assessment at University of Hawaii, Macquarie University, Temple University Japan, and Columbia Teachers College.



古屋 靖二 (FURUYA, Seiji)

九州大学大学院文学研究科修士課程修了(文学修士)

西南学院大学文学部教授(英文学科所属)

専門: イギリス文学(演劇)

担当科目: イギリス文学演習(シェイクスピア)、英米文学・文化研究、英米文学講読(劇)、LL演習、英語など

論文: 主にシェイクスピア関係のもの



中西 均 (NAKANISHI, Hitoshi)

1959年大阪生まれ

1982年創価大学文学部英文学科卒業

同年4月より関西創価中学校高等学校英語科勤務

2001年より文系Ⅱクラス(海外留学希望者クラス)を担当

TOEFL-ITP 導入事例(大学の部)

I. 国立大学

I-1. 北海道大学(所在地:札幌)

発表者: 北海道大学 言語文化部 教授 竹本 幸博 氏

1. 導入の経緯

本学では平成 14 年度の入学生から TOEFL-ITP を導入しました。本年度は約 300 名を対象とした実施でしたので実施の問題点を発表できる母数には達しておりませんが、平成 15 年度は約 2,300 名を対象に実施しますので、さまざまな問題点等を把握できるかと思えます。

導入の経緯は次の通りです。現在の学長である中村法学部教授が、留学を志した学生が TOEFL を受験してもなかなか目標とする点数を取れず、結局夢を果たせない事例に以前から接し、そのことを非常に残念に思われていました。留学する気持ちが起きる前からウォーミングアップのつもりで受験していれば、目標とするレベルに何点足りないかを客観的に知ることができ、在学中に何回かテストに向けて勉強できますし、また目標に届くまでどのくらいの学習量が必要かという目安も分かるでしょう。いきなり受験して、TOEFL の点数が低いが故に留学の夢を絶たれるということを多く見聞きしているうちに、大学としても、学生に TOEFL のようなテストを受験させるシステムなり努力がなされるべきだという考えを学長は持たれたようです。英語科にも検討してほしいと依頼をいただきました。

本学でもこれまでは、一橋大学や筑波大学など他の国立大学で行われているように独自の統一試験を実施していました。これは、TOEFL や TOEIC のような外部検定試験に近い問題を自分たちで作り、実施するものです。全学年で同じ試験を行いますので客観的かつ絶対的な評価が分かるということで実施してまいりました。

ただし問題を作るのは教員自身ですし、マークシート方式の採点も自分たちで処理しなければなりません。これがなかなか大変であり、教員の負担が増えて非常に困っていました。他の大学からも、マークシートは非常に手間がかかり、機械が少しでも壊れると採点ができないなど問題もあると聞いています。いずれにせよ、統一テストについては実施側でも不満を抱えていましたので、これを機に統一テストに代えて TOEFL-ITP を実施することを決定しました。これが平成 13 年度のことであり、実際の実施は平成 14 年度からになりました。

2. 懸案

当初われわれ英語科では非常に強い懸念がありました。

第一に、受験料の徴収方法です。国立大学では学生から受験料を徴収して外部検定試験を受けさせる事例はあまりないと思いますが、それを義務化しなければなりません。それにまず抵抗がありました。これは後述します。

第二は評価の割合です。2,300 名もの対象者がいますと中には全く勉強しない学生もおります。このような外部検定試験を導入し、何点以上を取らなければならないという基準を設定すると、到達できない学生は永久に卒業できなくなりますから学部も英語科も困ることになります。そのため、TOEFL-ITP の評価の割合は、普通の授業の成績と半分ずつにしました。授業は試験にも役立つような内容を取り入れ、試験も早目に受験させることとしました。前期の学生は 6 月、後期の学生は 12 月頃にテストを受け、その点数と普通の授業の点数を一对一の割合で勘案して評価を出します。またスコアは、成績に反映させるという形で導入いたしました。本格的な導入の前に試行試験も実施し、平均点等の基礎数値の見当もつけております。ただし、大学ではなく学生個人

が受験料を負担することもあり、具体的な点数等は公表いたしません。500 点以上をマークする学生はおりますが、600 点以上になりますと最も優秀な学生が集まる医学部系を除いては、なかなか取得するのは難しいようです。

3. 受験料徴収方法

北海道大学では、北大生協(北海道大学生協同組合)が外部試験の実施を一切請け負ってきたという実績があります。TOEFL-ITP についても全面的に北大生協が実施を引き受けてくれたため、受験料の徴収という課題についてもクリアすることができました。私達からは学生に生協で申込手続きを取り、所定の受験料を払うように案内すればよいこととなります。通常は生協に請求する会場使用料については、英語の授業の一環ということで無償提供としました。この方法で今年(2002年)6月に実施した初回の実績では、328名の対象者中317名が受験しています。数名が漏れていますが、何を言っても授業に出ず、同級生も顔を見たことがない学生もおりますので、実際にはこんな数字になるかと思えます。学生も身銭を切って受験料を払うと気構えが違ふようで、遅刻した学生も非常に少なかったと聞いております。

今年は300名程度の実施ですが、来年度には後期だけで1,800名が一度に受験することとなります。試験監督員も相当な数が必要になりますが、生協では今まで各種検定試験の監督員を養成して確保しているとのことですので、多分この一年内に体制を整えてくれるものと思えます。

4. まとめ

国公立大学で TOEFL-ITP など外部試験を導入する際の一番の問題点は、事務方の理解と協力を取り付けるのが難しいことです。例えば、会場とする教室を外部団体が使うとなると、国家財産を使うわけだから使用料はどうなると事務の方々は当然の反応を示します。本学では授業の一環ということで無償としましたがそれでも不満の声はありました。受験料についても、本学は北大生協に委託することで解決しましたが、他の国立大学の友人などと話しますと、まずこの点でつまづいてしまって先に進まないということが多いようです。通常であれば国立大学では法律に基づく授業料や寄付金しか扱えないことになっていますから、それ以外のことについては大きな大学になればなるほど融通がききません。それでも北海道大学で意外と早く、また大規模に導入できたのは、次の四つの理由からです。

第一に学長からの強い意向があったということ。私ども英語科は小さな組織で、権限は学部が持っていますので、英語科からの発議ではまず不可能だったと思います。学長からの要望であるという強い後押しがあったればこそ、学内の調整も比較的スムーズに進めることができました。

第二は、最も大きな理由ですが、北大生協が受験料徴収や試験監督などを全面的に引き受けてくれたことです。受験料徴収については先に述べた通りですが、試験監督も教員が行うとなるとかなり疲れますし、統率が難しい。また人数を集めるのも大変になります。北大生協が実施・運営の全てを請け負ってくれなければ、この計画は成り立たなかったことは確かです。

第三は学生の意識が変わってきたこと。学生が自分でお金を払って試験を受けるかどうかは導入前の大きな気掛かりでした。携帯電話にはお金を使っても本や勉強に対する投資にはなかなか気が向かないのが現代の学生気質ですので、4000円もの受験料を払うだろうかと危惧していましたが、今年度の300名強の受験者については全く問題はありませんでした。就職難の世の中で、就職先が内定しても「4月の入社までに〇〇外部検定試験を何百何十点まで上げてください」などとも言われるようです。私共はまず留学ということを念頭に置

き TOEFL-ITP を選びました。経済学部や法学部ばかりではなく理科系もあり、理科系は留学する割合が非常に高いものですから、大学として導入する外部試験としては TOEFL-ITP に統一しております。また実力を上げれば他の外部英語試験でも連動して結果を出せると考えております。就職や留学など諸々の要因から外部検定試験に対する学生自身の抵抗が無くなっており、それに対する 3000 円なり 5000 円なりの投資は無駄ではないと考える学生が増えているのだと思います。

第四には「外部評価」も大学改革の課題として掲げられていること。英語科には 5～6 名の外国人教員を含めて約 30 名の教員が在籍しており、非常勤講師も 40 名近くおります。正直に申し上げますとこれら教員側からの反発もありました。予備校ではないのだから外部検定試験のための授業などできないという意見もあり、私自身にも学生からお金を取ってまでそのような試験を導入することに抵抗はございました。しかし、国立大学は独立法人化に向けて全国的に大改革が進行中で、その中に「外部評価」もキャッチフレーズの一つとして掲げられています。外部評価に堪えることをしているかどうかという実績としてこのような外部試験を導入することに皆納得し、また大学としてもいろいろな予算をつけてくれたり、時間割に配慮してくれたりと支援してくれました。最近でも TOEFL 導入をきっかけに、このような外部検定試験に向けての勉強に役立つのではないかとということで CALL というコンピューターシステムを導入することになりました。予算額としても大きく、維持費もかかりますが、授業や学生の自習に役立てることができることと思います。

最後に、私共がこの試験を導入できたのは北大生協の全面協力があつたからであることをもう一度強調させていただきます。

<Q&A>

Q 「岩手大学の三浦と申します。北大で TOEFL-ITP は習熟度別クラスに利用されているのかと思っていましたが、成績に反映させるというお話でした。どのように反映させていらっしゃるのか、具体的に何点以上取れば何単位ということがあればお教え願います。」

A 「習熟度別クラス編成を行うためにこのようなテストを導入するケースが多いようですが、本学の場合は 4 月の忙しい時期に二千数百人も学生を一斉に受験させることは日程上不可能です。また名簿を作る際に点数によって学生を振り分けなければならない、気が遠くなるような作業ですので行っておりません。

先にお話しました、TOEFL-ITP と通常の授業の成績を合わせて勘案する形にしましたのは妥協点を探った結果です。大学によっては何点以上取った場合には何単位を認定するということもあるようですが、これには少し引っ掛かるところもございます。例えば医学部あたりは授業を受けなくてもいい学生が随分出てくることになりましたが、これは果たして教育的であろうか。また英語や他の外国語の外部検定試験で単位認定している大学の例を見ましても、2 年間一生懸命勉強してようやく取れるような高いレベルの点数を設定しており、実質的にはほとんど意味がないのではないかと思います。実際に某旧帝大でも英語試験の点数だけで単位を認定されるのは年間十数名と聞きました。別の事例として、既に外部試験での単位認定を導入しているある国立大学でも、先生に伺ったところでは、実際には単位を認定するかどうかは英語による面接で決定するということでした。学生は TOEFL で何点という高いハードルをクリアしてようやくその面接を受ける資格を得られる。面接で聞いたり話したりという能力を見極められてようやく単位を認定される。このように外部試験の成績による単位認定を導入している大学でも点数を出せば自動的に単位を認定するという形にはなっていないところもあるようです。

成績評価の方法につきましては、先程も申し上げた通り妥協点を探った結果です。大学の教師は独立独歩で、なかなか統一した方針に従わないところがあります。統一教科書は長続きした試しがありま

せん。そんな中で試験に合わせた授業をするようにと言っても足並みが揃わないのが実情です。学生からすれば受験料を 4000 円近く払うのにそれに関する授業をしないのは不満でしょうから、多少は TOEFL に多いリスニングを意識した授業内容にするとか、練習問題なども取り入れるなど工夫していますが、それだけをやれと命令することはできません。教員の専門や自主性を重んじ、また授業の結果も公平に組み込むために、普段の授業の成績と外部試験の成績を一对一として総合点を出し、それをもって最終的な評価とする形にしました。ITP の成績については 100 点満点に換算する表を作成して評価に用いています。だいたい 500 点が 80 点相当となります。」

成績判定への利用ご参考(CIEE)---成績評価やプレイスメントなどさまざま---

(2001 年度 TOEFL-ITP セミナー事例発表の早稲田大学理工学部の場合)

早稲田大学理工学部では、毎年 2 月に 1 年生全員(約 1,800 名)に ITP を受験させる。1 年間を通じては少人数制の授業を展開し、先生方が開発したコンピュータ教材の自習プログラムとその内容に準拠したユニットテストを年 4 回実施。授業の評価とユニットテストの成績によって学生は単位認定資格を与えられるが、最終の成績(A~D)は TOEFL-ITP スコアによって判定。これは、従来教師により「優」を得やすい得にくいという格差を是正し、学生の能力を公平に評価するため。」

2002年10月11日

北海道大学での TOEFL-ITP 導入について

北海道大学言語文化部英語系教授 竹本幸博

導入の経緯:

平成13年、現学長の強い要望を受け、それまで英語系で実施していた統一試験(英語系独自で作成、実施)に代え、TOEFL-ITP 受験を全学生に科すことになり、平成14年度入学生を対象として開始。

実施の概要:

学生は2年次に展開される半期の必修授業とTOEFL-ITPを受験し、教師側はその成績と授業成績を総合して評価を出す。学部により履修形態が異なるため、6月に受験する学部(理、水産、医、歯)と12月に受験する学部がある。

受験手続:

受験料(¥3800)は個人負担で、払込及び案内は北海道大学生協が窓口となって一切を担当。

本年度実施状況:

本年度は理学部1年生授業履修者328名中、317名が6月29日(土)午前中に本学校舎で受験した。実施は監督員を含めて全て生協が担当し、英語教官は数名が教室を借りている立場上と、遅刻者、途中退席者などの不測の事態に対し、追試、再試などの指導するため立ち会った。

これからの実施:

本年度入学生が2年になる平成15年から本格的な受験体制になり、前期6月に約500名、後期12月に1700名が受験を迎える。それまでに受験申し込み、受験料納入、試験実施、成績送付等の業務が支障なく進むよう、生協側の準備に期待する一方、英語系も学生への連絡徹底、遺漏ない名簿などの緊密な協力体制を作り上げる。

これまでの経緯を振り返って:

現時点10月2日まで、予算措置をして実施した試行受験(86名受験、平成13年12月)と6月の理学部生受験と2度試験が行われた。いずれも事務局側は教室使用料徴収にこだわり、英語系は授業の一部であり、大学運営当局の要望を受けた実施ということを主張し、不徴収で押し切った。ここに国立大学、それも大きな国立大学で本試験を全面導入することの難しさが現れている。まず、受験料を大学窓口で徴収することなど有り得ない。外部団体に実施を委託すると、使用料徴収を始め、いろいろな制約の対象となる。教師にも学生にお金を負担させることに抵抗がある。それにもかかわらず実施が可能となったのは、

1. 英語系からの発議ではなく、学長からの要望で全学から承認された措置であったこと。
2. 北海道大学生協が実施業務の全てを引き受けてくれた、また、そうできる経験と実績を持っていたこと。
3. 現在の就職状況の中、各種外部検定試験に対する学生の関心の高まり。

4. 現在進行中の大学改革の一環となり得る。

といくつか挙げられるが、特筆すべきは2番の北海道大学生協の全面協力である。彼らの経験と実績がなかったら到底この企画は成り立たない。

TOEFL-ITP 導入事例(大学の部)(プレイスメント)

I. 国立大学

I-2. 東京医科歯科大学(所在地:東京)

発表者:東京医科歯科大学 教養部助教授 前沢 浩子 氏

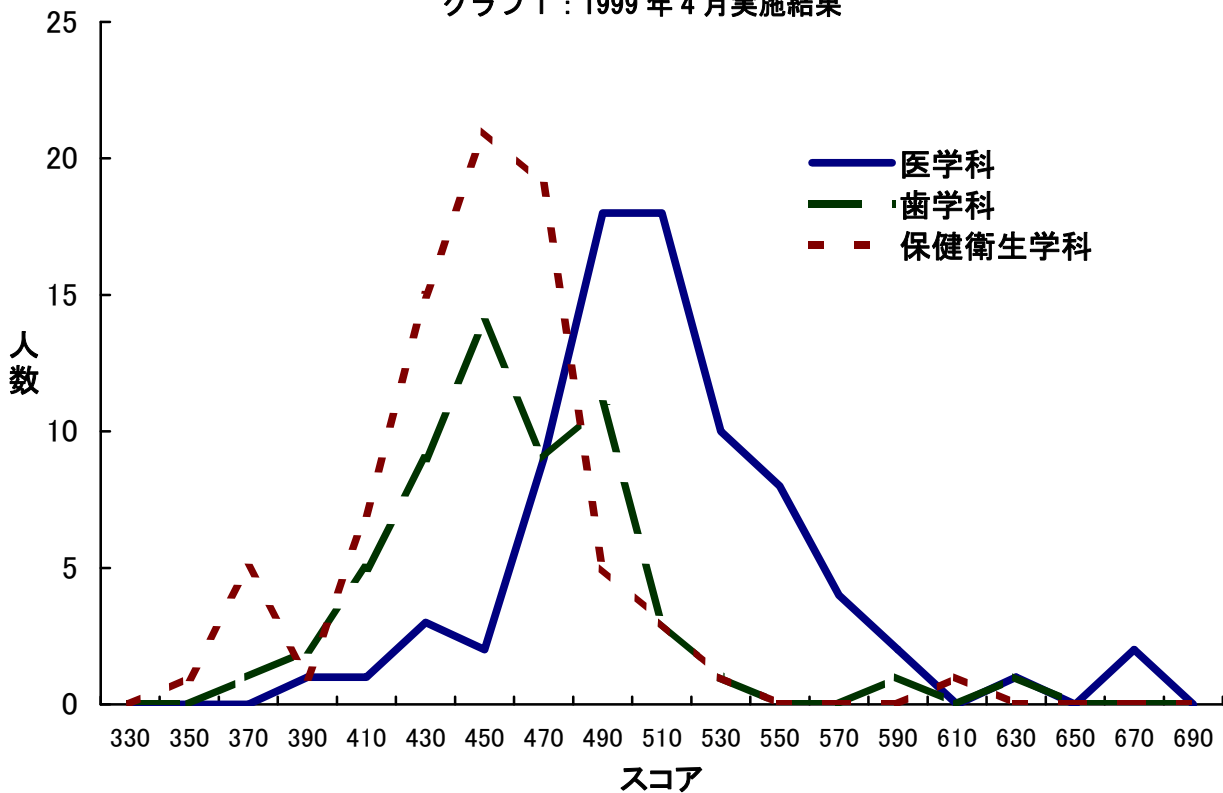
1999 年から本学では TOEFL-ITP をプレイスメントテスト及び効果測定に導入しております。今年で 4 年目になりましたが、テストを導入するに至った経緯、および 4 年間実施してみたの評価と私達が抱えております課題などをお話したいと思います。

導入に至る経緯

東京医科歯科大学には、医学部医学科、歯学部歯学科、医学部保健衛生学科という 3 学科がございます。プレイスメントテストを導入するまでは、学科別にクラス編成をしておりました。医学部医学科、歯学部歯学科は混成クラスで編成し、新たに発足した医学部保健衛生学科は別クラスでした。英語力の必要性があちらこちらで話題になりますとともに、本学でもクラスサイズを小さくしようという試みを行いました。そして、1994 年、学科別のクラス編成を残したまま、それまで 1 クラス 40 名程度で行っていた授業を 25~30 名にするダウンサイジングを行いました。しかし、この小さくしたクラスもやはり学科別のクラス編成でしたので、授業を行って一つのクラスの中はかなり学力差があると実感しました。どうしても真ん中ぐらいの学生に授業の進行や教材のレベルを合わせてしまいますので、英語ができる学生にとってはやや退屈ですし、英語が苦手な学生にとっては相変わらず苦手意識を強めてしまうということがありました。

そこで学生の今もっている英語力に合わせたクラス編成が必要だと考えまして、1999 年から TOEFL-ITP を使ったプレイスメントを導入しました。1 回実施してみると私達がなんとなく日頃の授業で「かなり英語力の差があるな」と感じていたことが数値ではっきりわかりました。これ(グラフ1)は 1999 年 4 月に行った第 1 回の結果で、例えば 490 点台に入っている学生が何人いるかというグラフです。東京医科歯科大学はご存知の通り理科系の大学で、数学あるいは理科という科目をたくさん受けて入学してきますので必ずしも英語力に関しては均質な学生が来ているわけではありません。このグラフをご覧になっていただければ分かるように、医学部医学科では一番スコアの高い学生は 670 点です。これはほぼ間違いが 1 つもなかった学生だと思います。この学生は実は留学生なのですが、日本人の学生も 600 点以上取る学生が何人かおりました。550 点以上の学生もかなりおります。一方で、400 点未満という学生もおりまして、同じ学科の中でもかなり幅があることがはっきりと数値でわかりました。歯学部歯学科でも、若干点数が医学科とは違うものの、やはり 600 点以上取る学生から 350 点台という学生まで本当に幅が広いです。保健衛生学科は別クラスで行っていましたが、同じように非常に良くできる学生から本当に英語が苦手だという学生までいることが一度実施してみてもはっきりとわかりました。

グラフ 1 : 1999 年 4 月実施結果



反対意見の説得

私たちは、TOEFL-ITP を利用して、英語力に合わせたクラス編成を行いたいと考えたのですが、英語科からのそのような提案に対していくつかの反対意見がありました。

まず一つめですが、本学は 1 年次に入ってくる学生が 210 名になります。その 210 名で英語の時間だけ独自のクラス編成を行いますと、小規模の大学で時間割にフレキシビリティがほとんどありませんので、他の科目の時間割にも大きな影響を与えてしまいます。それで時間割の変更が大変難しいとの反対がありました。

それからこれも良く聞かれる議論ですが、東京医科歯科大学は、国立大学の中で唯一教養部を残している大学です。そこで教養教育の理念を掲げているのに、非常に合目的に「役に立つ英語」というものを導入するのは教養主義から実用主義への転換になってしまう、とかなりの反対の声がありました。これについては、私達は繰り返し、「英語教育に関して教養主義や実用主義という二項対立がそもそも無効である、英語はあくまでも英語だ」という反論をしておりました。

それからもう一つ、国立大学ならではの問題なのですが、国立大学での利用事例がない、他に実施している大学がないという反対の声がありました。国立大学は言ってみれば教育をするための役所ですから、先例があるかないかということは非常に大きいのです。その当時、こちらの協議会(CIEE)にもお願いして、国立大学でどこか実施しているところはないかと調べてもらったのですが、東大の大学院が入試で多少利用している他には目立った事例がないということで非常に抵抗

感が強かったです。ここにも国立大学の方がたくさんおられるようですけれども、東京医科歯科大学では導入しておりますので、この先例を存分に利用していただきたいと思います。

試行と実施

このような反対意見はありましたが、なんとか実施にこぎつけました。しかし、すぐには実施せず、まずは認知度を高めたいという理由から、最初の2年間は試行を行いました。最初に TOEFL を導入してはどうかと提案した時に、学生だけではなく事務の方も同僚の教師も、TOEFL という言葉を聞いたことがあるだけという程度の認知度でした。ですから、まずは学内で試行をしてみて、どのようなものなのかについて、学生だけではなく、教師あるいは事務の方の理解、認知も高めたいということです。試行ですので、2年間希望者だけを募って TOEFL-ITP を年1回受験してもらいました。

2年間の試行の後、1999年より本格的な実施をすることになりました。その際に学内でいくつか手続きをしました。他の大学も困っていると伺っておりますが、かかる費用をどうするかが一番の問題でした。東京医科歯科大学の場合は予算を特別にたてることができませんでしたので、学生からの徴収ということになりました。結局、入学時に書類を渡して、その書類に郵便振込用紙を入れて徴収する方法を取っております。その際に学内規定は特に設けませんでした。大学の責任で行わずにあくまでも英語科で責任を持つ形を取りました。それ以外では、なかなか受け入れてもらえなかったというのが実情です。事務担当は経理ではなく、授業の一環として行いますので教務掛の協力を得て行うことにしました。つまり、国庫からの支出金等は一切なく、英語科がお金を徴収して実施する。それに際しては、学務課教務掛の方に事務的な協力をあおぐという方法を取りました。いずれにせよ、こういうことを実施するには事務方の協力が欠かせませんので、事務方からの厚い協力を得てようやく実施する事ができました。

実施方法

4月に新入生全員を対象にまず実施します。入学を喜んでいると次の日にオリエンテーションと共に半日間の英語の試験があるという、新入生にとってはいささか春の嵐のような半日を過ごすこととなります。この試験結果を用いてクラス編成を行います。この時期ですからクラス編成に時間的余裕がありませんので、試験が終わるとそのまま私達が解答用紙を CIEE に持ち込み、結果が出るや否や受け取って、なんとか第1回の授業までにクラス編成を間に合わせる。また間に合わなければ、せめて第2回目の授業からはなんとか間に合わせるというかなり綱渡りの日程で行っていますが、なんとか対応できております。その結果、先ほど申し上げましたように210名の新入生を6段階8クラスに分けて授業を行っております。本学は3学期制なのですが、第2学期の終わりが11月末になります。第1、第2学期に必修の授業が入っており、第2学期の必修の授業が終わった時点で再度全員に TOEFL-ITP を受けてもらっています。これは大学に入ってからどのくらい英語の力が伸びているかの効果測定をしたいということと、学生にとっても一つのモチベーションになるかもしれないという期待からです。上級生になっても受けてみたいという学生も何名

かおりますので、希望者は4月・12月のいずれでも1年生と一緒に受験できる体制を整えております。さきほど申し上げたように当初は本当に認知度が低かったのですが、最近は上級生だけでなく、教師や事務の方の中でも、わずかな人数ではありますが一緒に受験する方もいらっしゃいます。

成果

4年間実施してきたどのような成果があったかということ私達は次のように考えています。一つは、学生の動機づけに役立っているのではないかと。もちろんプレイメントテストとして実施し、比較的英語の力が近い学生と一緒にして、授業の仕方をそれに合わせてできるということもありますが、それ以外にやはり学生の動機づけになっているのではないかと考えています。12月の効果測定の試験は、1年次の必修科目の一部で、成績の中に組み込まれます。日頃の授業とTOEFL、12月の第2学期末に行うOral Test(口頭での試験)の3つを合わせて1年次の英語必修科目の成績判定材料にしています。成績のためという以外に、もう少し長期的な視野で考えますと、学生にとっては英語学習の動機づけになっているのではないかと思います。大学入試のために英語を勉強してきた新入生も、TOEFLを受験する事によって、例えば将来海外で勉強するという新しい目標を持ったり、すぐには留学を考えていないけれども、国内で友人の成績と比べることより少し大きな視点に立って自分の英語力はどのくらいなのか、それをどのくらい伸ばすことができるのかという一人一人の物差しを持つ動機づけになっているのではないかと思います。

教師の側もやはり導入したことによって次のようなことが言えると思います。一つは教育効果です。日頃、行っている教育がいいのか悪いのか、効果が上がっているのかいないのかということについて(成績が)伸びている以上は決してマイナスにはなっていないと言える証拠になるわけです。大学の英語の授業はあまり役に立たないという議論もありますが、実際に役に立っていると数値で現れているものと思います。具体的には、2001年度の結果を(表1)では、4月に入ってきた時点では、平均点は470点くらいですが、12月には平均点が30点ほど上がり500点くらいになります。個々の学生で見るとかなりスコアが伸びています。これは学生だけではなく教師の側も少し励みになり、嬉しい数値になるわけです。この表で見る限り、毎年4月の結果を見ると平均点は470点前後とほとんど変わりません。センター試験との相関はないとはっきりいえませんが、だいたい毎年入ってくる学生というのは同じような英語の力を持っているのだとこの数値から分かります。

1999～2002年 TOEFL 結果

		平均点	最高点	最低点
1999年 4月	全体	472.5	677	353
	医学部医学科	508.2	677	380
	歯学部歯学科	459.1	633	360
	医学部保健衛生学科	446.4	613	353

1999年 12月	全体	472.9	657	333
	医学部医学科	507.3	657	333
	歯学部歯学科	460.0	617	340
	医学部保健衛生学科	448.1	603	333
2000年 4月	全体	469.3	610	350
	医学部医学科	503.3	610	403
	歯学部歯学科	458.3	563	357
	医学部保健衛生学科	444.5	603	350
2000年 12月	全体	481.0	627	363
	医学部医学科	514.1	627	410
	歯学部歯学科	471.8	567	397
	医学部保健衛生学科	455.2	560	363
2001年 4月	全体	470.8	630	350
	医学部医学科	502.4	630	350
	歯学部歯学科	457.0	580	357
	医学部保健衛生学科	449.8	603	367
2001年 12月	全体	501.0	650	377
	医学部医学科	529.2	650	413
	歯学部歯学科	490.5	593	424
	医学部保健衛生学科	480.5	607	377
2002年 4月	全体	480.8	623	377
	医学部医学科	504.6	600	400
	歯学部歯学科	476.5	603	393
	医学部保健衛生学科	460.4	623	377

今後の課題

こうして3年間実施し、今年で4年目に入ったのですが、今私達が考えていることは次のようなことです。TOEFLは「目的」ではなく、あくまでも手段であるということが3年間実施してきて改めて分かると思います。非常にスコアが伸びている年、伸びていない年と比べてみますと、非常にスコアが伸びている年は、TOEFLの問題を使ったスキル重視の科目を導入した年です。ただし、スキルを獲得するための授業を主体とするのではなく、コンテンツにも焦点を置いた科目を組み合わせる事によってより効果的な英語教育ができるのではないかと考えております。

単にTOEFLを学習の目的にするのではなく、自分の英語の力を測る目安なのだとして学生が実感する必要があると思います。先ほど実用主義と教養主義の二項対立は不毛な議論ではないかと

言いましたが、英語というものを身につけると豊かな歴史、教養に触れることができる、一方、やはりそれは実用性とも分かちがたく、数値では見えてこない部分もあるものです。それを学生に感覚的に分かってもらいたいと思ひまして、自主教材を作ってみました。私達は PRISM という教材を作ったのですが、これは本当に内容重視のものです。しっかり読めば語彙も身につく、その中で少しずつ英語を使って見えてくる世界が広がる、それとともにスキルが身につく、外国語を学習することはそういうものだということを学生に実感してもらうような授業をしたいと私達は考えております。

本学は医療系の大学ですので、今後ますます国際化が促進される時代にあつて、英語は医療人として必須の道具になるのだという認識の中で TOEFL を導入して初めて意義があるのではないかと考えております。これは医療の分野に限りません。英語を身につける目的は何かという大きな目的を枠組みの中で TOEFL を利用することによって、利用価値がより有意義になるのではないかと考えております。TOEFL のスコアは一人一人が持つ物差しのようなもので、その物差しを携えながら国際化の時代に若い人達が一步でも歩み出せるようなきっかけにするのが、私達が TOEFL を導入した目的であり、その目的を改めて認識しながら利用しているところです。

<Q&A>

Q1 「筑波大学の望月です。お使いの Level 1 の試験で非常に得点が低い学生がいますと思ひますが、そのような学生に対してどのような指導をされているかという対策を教へて下さい。また、12 月の成績は平常点と Oral test と TOEFL を入れるということですが、TOEFL はだいたい何割くらい入れるのか教へていただきたいと思ひます。」

A1 「先ほど申し上げましたように 6 段階の一番下のクラスが、400 点以下の学生が 20 数名集まっているクラスになります。そこでも上のクラスと同じ教材を用いて教へております。少し宣伝になりますが、私達が作った自主教材を研究社から出版してもらいました。もしご関心のある方がおられましたらご連絡いただければお送りいたします。600 点以上の学生も 400 点に満たない学生も同じ教材を使っているのですが、できる学生は要求もかなり高いので、内容も深く、スピードも速く読んでもらっています。ちょっと力の足りない学生は読みやすい教材をゆつくりと、例えば単語テストをするとか、あるいは Listening の授業も比較的聞きやすいものを繰り返すとか、同じ教材の中から少し易しい部分をピックアップして時間をかけて教へるという指導をしております。

評価は、24 週間の授業を 50%、TOEFL を 20%、学期末の試験は 30%という比率で成績評価をしております。」

Q2 「金沢大学の沢田です。クラス分けの結果を出すときに、第一週に間に合わない場合は第二週にということでしたが、その場合には第一週はどうされるのか、もう一つはこういった形で

プレイスメントをすると未受験者がたいてい出ると思いますが、そういった場合どうされているのでしょうか。」

A2 「受験しなかった学生は、例年 210 名の中に 2~3 人はやはりおります。TOEFL の Preparation Kit (CIEE が販売する公式教材) や、あるいは市販されている TOEFL の問題集などを全く同じ形式で別の時間に行いまして、私共で採点しておよそ何点と出してふさわしいクラスに入れるようにしています。プレイスメントの結果が第 1 回目の授業に間に合わない場合は、1 週間に 2 回授業がございますので、1 回目の授業はオリエンテーションのようなことを実施いたします。本学では、二つのクラスを一方は読み書きを中心としたクラス、一方を Native Speaker による Listening と Oral Communication を目的としたクラスとしておりますので、Native Speaker の教員にこれからどのような授業を進めていくのかを学生に説明してもらうのが 1 回目の授業としてクラス編成作業が間に合わない場合を凌ぐ手段になっています。」

Q3 「もう退官しましたが、元文部省(現在の文部科学省)の小笠原林樹と申します。以前は、日本人は読解力があるといわれていましたが、私が東大・早稲田大で長く教えてきた経験から申し上げますと、本当の意味の読解力はない、暗号解読力しかないと思います。東京医科歯科大で実施されている TOEFL-ITP から見ると、学生の読解力がいいのか悪いのかということを知りたいのですが。」

A3 「きちんとした数字では出しておりませんが、学生のスコアをざっと見た感じですと、各セクションのうち、どれか突出していいとか悪いということはありません。500 点取れる学生というのはだいたいどのセクションも 45 点から 55 点のくらいの間に入っています。『読解だけ是可以』というような事は特にないのだということを改めてスコアが示しているように思っています。」

以上

2002 年 7 月 23 日

東京医科歯科大学における TOEFL/ITP 利用について

東京医科歯科大学教養部助教授 前沢浩子

1. 導入までの経緯

(1) 学科別クラス編成から能力別クラス編成へ

東京医科歯科大学では 1994 年から、英語授業のクラスサイズを若干小さくし、ほぼ 30 名程度で授業を行ってきた。ただしその編成は医学部医学科、医学部保健衛生学科(看護学専攻および検査技術学専攻)、歯学部歯学科という、入学時での専攻別に従っていた。実際の授業では同じクラスの中に、かなり英語が得意な学生と苦手な学生が混在し、授業内容をおおよそ平均的なところに合わせると、力のある学生にとっては退屈で、力不足の学生はますます苦手意識を大きくしてしまうという実態だった。プレイスメントテストを行い、その結果によってクラス編成を行いたいという提案を、英語科から教授会に申し出ることにした。

(2) 反対意見

この提案に反対する声は小さくなかった。1 学年 210 名のごく小さな大学で、英語の授業だけ独自のクラス編成にしようとする、全体の時間割を変更してもらう必要があった。また大学設置基準の大綱化以来続く教育改革の流れの中で、このようなクラス編成をすることが、旧来の「教養主義」の良い面を壊す「実用主義」重視だという反対意見がかなりあった。さらに国立大学での利用事例が当時はほとんどなく、事務方の抵抗感も小さくなかった。

(3) 試行と実施

1996 年と 1997 年にそれぞれ 1 回、受験を希望する学生のみを対象として試行を行い、学生および事務方、他の教師たちの TOEFL/ITP への理解、認知を広める努力をした。その後、教授会の承認、事務方からの協力を得て、1999 年の新入生からは、1 年生の 4 月と 12 月の 2 回の受験を義務づけることとなった。それ以外でも、希望する学生および教職員は、その際に同時に受験できるようにした。4 月はプレイスメントテストとして、12 月は学期終了時の効果測定として、それぞれ利用している。

2. 受験料徴収など学内事務手続き

導入に際して事務手続きを整備してもらおうとしたが、東京大学の大学院で一部利用されている他は、国立大学での利用事例がなかった。そこで私たちは次のような位置付けと受験

料徴収方法を採択した。あくまで英語科が行う授業の一部として学務系の事務処理として扱っている。

- 学内規定は特に設けない
- 教養部英語科の責任で郵便局に口座を開設し、学生はそこに受験料を振り込む
- 振り込み用紙等は入学時の書類とともに配布する
- 入金や出金の確認、未受験者への返金などは教養部教務掛の協力を仰ぐ
- それ以外の申し込み手続き等は英語科教師が行う

3. 成果

添付資料にあるとおり、試験を実施してみると、600 点以上を取る学生から、300 点台の学生まで結果に大きな差があることがわかった。現在、210 名の学生を 6 段階 8 クラスに分けて、クラス編成を行っている。同じ教材を用いても、進度、説明の仕方、与える課題などを変え、学生の理解度に応じた、より適切な指導が可能になったと判断している。また 4 月と比べて 12 月の受験でスコアが伸びる学生が多く、学生にとってもこの受験が英語学習の動機付けのひとつになっていると思われる。

1999~2002 年 TOEFL 結果

		平均点	最高点	最低点
1999 年 4 月	全体	472.5	677	353
	医学部医学科	508.2	677	380
	歯学部歯学科	459.1	633	360
	医学部保健衛生学科	446.4	613	353
1999 年 12 月	全体	472.9	657	333
	医学部医学科	507.3	657	333
	歯学部歯学科	460.0	617	340
	医学部保健衛生学科	448.1	603	333
2000 年 4 月	全体	469.3	610	350
	医学部医学科	503.3	610	403
	歯学部歯学科	458.3	563	357
	医学部保健衛生学科	444.5	603	350
2000 年 12 月	全体	481.0	627	363
	医学部医学科	514.1	627	410
	歯学部歯学科	471.8	567	397
	医学部保健衛生学科	455.2	560	363
2001 年 4 月	全体	470.8	630	350
	医学部医学科	502.4	630	350
	歯学部歯学科	457.0	580	357
	医学部保健衛生学科	449.8	603	367
2001 年 12 月	全体	501.0	650	377
	医学部医学科	529.2	650	413
	歯学部歯学科	490.5	593	424
	医学部保健衛生学科	480.5	607	377
2002 年 4 月	全体	480.8	623	377
	医学部医学科	504.6	600	400
	歯学部歯学科	476.5	603	393
	医学部保健衛生学科	460.4	623	377

TOEFL-ITP 利用事例(大学の部)(新カリキュラムにおける統一試験)

I. 国立大学

I-3. 横浜国立大学(所在地:横浜)

発表者: 横浜国立大学 教育人間科学部教授 高橋 邦年氏
経営学部 助教授 小林 正佳氏

1. 統一テスト実施要領

目的

本学の教養教育運営委員会(教養教育の全般を司る全学の委員会)の下部組織である英語部会にて、教官によって評価にかなりのばらつきがある事実を顧みて、より客観的で公平な評価を目指そうという全学的な見解を得ました。

統一試験の候補として TOEFL の他、TOEIC 等幾つか候補に上がりましたが、結果的に、本学の学生の英語力を高い精度で測定しようという観点から TOEFL-ITP の Level2 を採用いたしました。

本学では、学部によって多少外国語の履修基準が異なりますが、1 年次にほぼ全員の学生が「英語 I」を履修いたします。その中身は、「英語 I-S」(Speaking)、「英語 I-W」(Writing)、「英語 I-R・L(前期)」(Reading & Listening)、「英語 I-R・L(後期)」(Reading & Listening) (各 1 単位)となっており、「英語 I-R・L(後期)」において TOEFL-ITP の受験を目標にした授業を展開していくことになりました。

受験資格

平成 13 年度の初実施にあたり、統一テストの受験資格認定というものを一つ設けました。英語 I-R・L 講義を TOEFL 受験のトレーニングクラスと位置付けまして、全員に無条件で受験資格を与えるのではなく、そのトレーニングの修了者に対して受験資格を与えるというステップを踏むことにいたしました。

受験資格は、①5 割以上の出席(学則規定により必須要件)②授業への貢献度 ③簡単な小テストの結果、の 3 点を勘案して授業の担当者が判断し、全学に掲示して学生に周知する方法を取りました。この段階で受験資格なしと判定される学生はごく少数ですが存在しました。

評価

評価は、TOEFL-ITP レベル 2 のスコアが、実際に英語 I-R・L 講義の評価そのものに直結します。つまり、ITP の結果によって成績判定が行われることとなります。先ほど申し上げた英語部会を中心に、英語 I-R・L 講義の担当教員等が基準点を定め、これに則って各学生の評価を決定していく形になりました。そしてこれも極々少数なのですが、後期の R・L 講義を落した学生の再履修方法として、翌年の前期の英語 I-R・L 講義をもって再履修させることにしました。本来、これは後期に行われる科目ですが、後期は TOEFL-ITP 受験を前提としたコースとするため、再履修者をな

るべく出さないようにしようという考えからです。前期で行われていた形の Reading と Listening を折衷したクラスで必要な単位を修得してもらい、ITP に向けての後期のクラスはなるべく 1 年生に限定して進めていく形をとっております。

受験費用

受験費用については、前述の教養教育運営委員会で、年次の教養教育予算の中にあらかじめ組み入れております。従って、学生の受験料負担はございません。大学が校費で行っていることとなります。

2. 実施と結果

実施

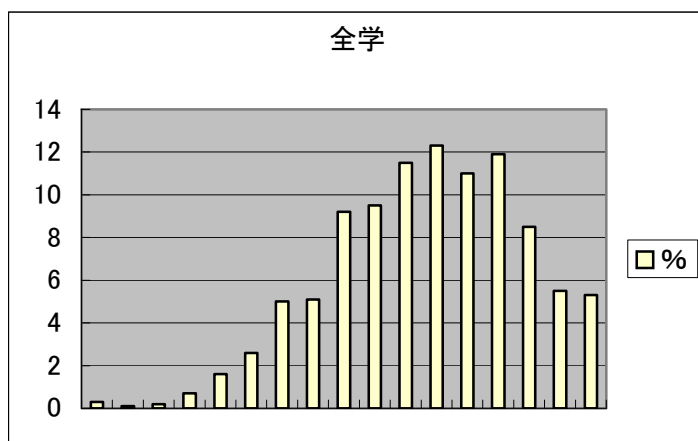
本年 1 月 30 日に、統一テストとして TOEFL-ITP Level 2 を実施しました。試験時間は約 70 分ですが、集合・着席などの時間も含めると、1 セッションで約 2 時間かかりました。2 回に分けて実施した理由は、1,600 人の英語 I 受講者(1 年生)に対し、横浜国立大学の Listening システムでは一度にそれだけの人数を捌けないためです。そのため、なるべく学部が重ならないように半数ずつ分けて行いました。

Listening は、赤外線ヘッドフォンに音を流す方式です。何らかの事故で音が遮蔽されることがない限り、どこに座っている学生も同じ音で聞こえるようになっています。「私は音が聞こえなかった」「遠くだったから雑音があった」という苦情は一切出ないようにいたしました。

教室は全部で 8 教室使い、当日の監督は主に英語教官と教養教育運営委員会に関わる全学の委員の先生方をお願いし、足りない部分は大学院生に入ってもらいました。初めてでしたので、協議会(CIEE)に相談したところ、有料ですがプロのスーパーバイザーの方をお世話して下さることでしたので、各部屋に 1 名ずつ入ってもらいました。

約 1,600 の席を前日から用意して備えましたが、結果的に、当日の受験者数は 1542 名でした。その他に当日に本来受けるはずだった者が 60 名程いたこととなります。

結果



いわゆるベルカーブ状の結果が得られました。500 点のところ右側が切れていますが、Level 2 をご存知の方であれば、理由はお分かりのことと思います。(CIEE 注: TOEFL-ITP Level2 は TOEFL500 点までの力をより正確に測定するテストであり、最高点は 500 点です。)500 点を取った学生の中には、帰国子女等も含まれています。実力的には 650 点を取った学生もいた可能性があります。おそらく Level 1 の試験を実施したならば、もっときれいなベルカーブになったと思われると思います。

一般的に、日本人の場合は Listening が弱いだろうと推測されます。特に横浜国立大学に来る学生は、公立の進学校出身の生徒が大変多く、中・高においてはほとんど外国人と接していない生徒が大半でございます。Listening を特に勉強してきたという学生も少ないですし、大学に入ってから Speaking や R・L のクラスで聞く機会があったという程度ですので予想としては余り点数は良くないだろうと思っておりました。セクション別の平均点、点数別の分布表では、やはり Listening は他のセクションより若干低くなっております。カーブの形自体はそっくりなのですが、左側にずれた形になっています。その分、他のセクションについては満点で頭打ちになる学生がかなり出てきております。500 点満点の学生が、実際にはどのくらい高いところまで行ける力があるかは調査しないと分かりませんが、長い目で見て Level 1 に変えることも今後検討していくつもりです。

スコアの利用方法

せっかく TOEFL を導入したので、スコアをただ成績に利用するだけではなく、カリキュラムを組む中で利用しようということも決まりまして、英語Ⅱのクラス編成にこの ITP の成績を使うことにしました。実際には、スコア順に輪切りにしてクラスを決定する方法と、選択的な要素のある英語の科目を取る場合には、高い点数を取ったものに優先権を与える方法で、英語Ⅱのクラス編成に利用しております。

英語Ⅲ(Advanced)というのはごく最近議論して決まったものですが、来年度の春から実施します。経済学部だけが試してこの方法で行うわけですが、英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと順番に取っていても、必ずしも学生の英語力が 1、2、3 と伸びていかないのは多くの方々をご存知の通りです。その理想と現実のギャップを埋めるために英語Ⅲ(Advanced)を設けまして、この統一テスト(TOEFL-ITP)を受けた 500 点近辺の生徒は、英語ⅡなしでⅢを履修できる、また、帰国子女など特に英語力の高い学生については、最初からⅠ、ⅡをスキップしてⅢを履修できるという方法を考えております。

また、担当された先生方には、担当クラス全員分のスコアをフィードバックしております。これは、ご自分の授業への評価・改善等に役立つものと考えております。

学生への意識調査

- | | |
|-------------------|-----|
| ・同一試験, 同一評価は良いか? | 1.5 |
| ・TOEFL 志向の授業は良いか? | 1.6 |

・TOEFL Level 2 (vs. Level 1)は良いか？	2.1
・TOEIC (vs. TOEFL)のほうが良いか？	1.4
・Level 2 の難易度は適当か？	2.0
・他の英語科目より勉強したか？	2.3

受験者を対象としたアンケートを今年度 6 月に実施いたしました。ここでは全部を挙げておりませんが、10 項目について訊いております。「同一の試験をし、同一の評価をするということはどう思うか」という問いに対し、「良いと思う」を 1 番、「どちらでもない」を 2 番、「良くないと思う」を 3 番として回答させました。その平均点は 1.5 ということで、大半が好意的だったとこの数値で読むことができます。同じように、「TOEFL 志向の授業を行ったことについてどう思うか」については好意的だったと読めます。「Level 2 と Level 1 ではどちらがいいか」に関してはほぼ半々のばらつきでした。2 番(どちらでもよい)が一番多い選択肢でした。また、Level 1 は ITP でも公的に使える、Level 2 は使えないという勘違いがどうもあったようです。TOEIC と TOEFL に関しましては若干 TOEIC の方が学生には興味があるようでしたが、これも勘違いがございまして、TOEFL は学校で行うものは資格として使えない、TOEIC はそのまま使えるという判断であったように思われます。「Level 2 の試験の難易度はどうであったか」については人によっては簡単過ぎたし、人によっては難しすぎた。一番多いのは真ん中の 2 でした。意外ですが「他の科目より勉強したか」という質問に関しては「さほどしていない」ということが分かりました。しかし、担当の先生方からは、授業中は新しい事をしたので学生の顔つきが違っていたと伺っております。

センター試験との相関

センター試験を受けたものの中で、統一試験を受けたものと相関を取ってみますと、0.43 程度でございました。これをどのように捉えるか、批判的な事は申し上げませんが、相関がないと私などは感じます。判断はこの数値をご覧になった方にお任せしたいと思いますが、測っているものが違うのではないかと感じました。以上ですが、何か皆様のご参考になればと思います。

<Q&A>

Q1-1 「筑波大学の望月です。質問が幾つかございます。

- ① この資料にある再履修生が実際には何%だったか。
- ② TOEFL-ITP を公認の点として扱う場合、フルテスト(Level1)の場合は 550 点と言える訳ですが、Level2 についてもこのように使えるのかどうか。
- ③ 入学後すぐに新入生に TOEFL-ITP を実施した場合、採点にどのくらいの処理がかかるのか。数日以内に採点されないとプレイスメントテストとして使えないと思いますが、どのくらいなのか。

- ④ Level 2 の代わりに今後 Level 1 を使うことも検討するというお話でしたが、その場合、費用はどうなるか。また、問題自体はどうなるのか。」

A1-1(高橋)「再履修の率は、細かいところは現段階では分からないのですが、英語を履修したと思われる数が1800名くらいです。その中には現3~4年生からの再履修生も含まれておりますので、恐らく1620~1630程度が1年生で履修登録した数だと思われます。TOEFL-ITPを受験した1542名はとりあえず皆合格しましたので、残りが落ちたもので恐らく今年度どこかで再履修しているものと思われます。」

Q1-2「資料の最後にセンターテストとの相関がありますが、センター試験にはListeningが入っていませんので、そのまま相関を取ったのではおかしいのではないのでしょうか。」

A1-2(高橋)「実は言うまいと思ったのですが、セクションの中で最も相関があり、この数値(0.43)に一番近いのはListeningでした。その他については0.2とか0.3など悲惨なものです。」

②~④についてはCIEEより回答。

- ②: TOEFL-ITPのスコアが外部に適用できるかどうか

スコアを受け取る大学、または教育機関のご判断による。TOEFL-ITPが過去に一度出題された問題を利用しているために、International TOEFLと同じ様に受け入れるには問題ありと判断される団体もある。また、団体に実施が委ねているので、TOEFL主催団体であるETSの実施規定に則って実施されているかが分からないということもある。

実際にコンピュータの試験会場も限られており、ペーパーの試験も実施の回数が少ない事から、信頼ある団体で実施されるTOEFL-ITPについては海外の大学もまた日本国内の大学も受け入れるところが増えている。ETSもITPにCertificate(認定証)を出すという計画もあるので、今後はなお一層公的な資格に近い形で利用いただけると思う。

- ③: プレイスメントテストの場合の採点期間

ラッシュ・スコアリング・サービスご利用時には「マテリアル到着から5営業日後に発送」と案内している。しかし、どちらの大学もプレイスメントテストには非常に短い期間で採点する必要があるので、CIEEでもできる限り希望に沿う様、実際には中1日(マテリアルが当事業部に届いてから翌々日の発送)というスケジュールで渡している団体が多い。郵送の時間もプラスしてかかるが、都内の大学等の場合はバイク便や持込みなどで、往復の返送にかかる時間を短縮されることもある。

- ④: Level1の問題構成と費用について

Level1では、半年毎に3フォームずつ入れ替えをし、年間6フォーム利用できる。

Level 1 は International TOEFL の過去問題なので、形式は全く同じ。受験料は Level1 の方が若干高い。」

Q2 「成蹊大学 国際交流事務室の中田 達也と申します。まず一点目に、後期の英語 I-R・L では TOEFL 受験を目標にした授業をされているということですが、統一テストを導入された目的は、英語力の伸びを測ることだと思います。TOEFL を念頭に受験対策の授業をしてしまうと TOEFL で高い点数を取ること自体が目的になってしまい、本末転倒ではないでしょうか。

二点目は、TOEIC と TOEFL のどちらがいいかということです。スコアの使い道から考えますと、日本の学生には TOEFL より TOEIC のほうがいいのではないかと私は感じます。TOEFL は英語圏の大学に留学するときに必要な試験ですが、TOEIC は日本の企業に就職するとき大変強い資格です。英語圏の大学に留学する学生は 1%にも満たないと思いますが、就職する人は半数以上いるので、その点においては TOEIC のほうがいいのではないかと思います。そのことについてご意見を聞きたいと思います。」

A2-2(小林)「まず後期の R・L の内容とその目的としているものが合わないのではないかとこの質問ですが、R・L の内容をその授業で教えるという目標自体は変わりません。ただ、その R・L を教える教材として TOEFL に準拠したものを選び、授業を進めていく中で最終的に TOEFL を受けるわけです。また、どのような勉強を家で行い、どのような心積もりでいたらよいかということも話しております。ですから必ずしも TOEFL で高い点数を取ること为目标にしているわけではなく、あくまでも比較的高い点数が結果的に出るものと考えております。

TOEIC と TOEFL の選択に関してですが、我々の大学で英語の何を教えるかを考えますと、TOEFL の内容の方が若干近いのではないかと考えております。TOEIC はかなりビジネス系の英語を測っているように思いますが、すべての学部の学生にビジネス系のことを教えようとは英語教官側は考えておりません。非常に高い点数を取るようなら、もちろん留学や就職に有利に使うでしょうが、このような外部テストの存在を知らない学生がほとんどですから、それに慣れてもらうという目的もあります。また TOEIC も勉強の仕方は大きく違いませんので、今後 2 年・3 年となる間に自分の能力を上げて、自分に合ったテストを選べば良いのではないかと思います。ある人はコンピューター版 TOEFL を受けるでしょうし、ある人は TOEIC を受けて点数を上げていくでしょう。あくまで 1 年生の最後のテストですから、最終の目的ではなく、ワンステップであると考えております。」

Q3 「山形大学の山口と申します。今後注目される赤外線を横浜国立大学では既に導入されていると伺い、驚きました。これだけの赤外線ヘッドセットを用意しますと、簡単に割っただけでも 800 本。かなりの費用かと思われそうですがその予算はどうされたのでしょうか。

興味がありますのでぜひお聞かせ下さい。」

A3(小林)「Listening テストは何らかのシステムがないとできないわけですが、そのためにより良いものは何かと検討しました。理想的には全員が同じ音で聞こえることが必要ではないかという発想を伝えたところ、何社かの業者から提案があったのが赤外線でした。実際に1部屋か2部屋には10年前からあったのですが、その時代のものより数段良いものが出てくると説明を受けて赤外線にしたいと考えました。予算は、教養教育の特別経費が文部省から降りますので、それに計上して設備を設置する事ができました。単にこの試験の為だけであれば実施は年に1回ですから賛同は得られなかったでしょうが、日常の授業の中でも有意義に活用できますので、その辺を根拠に提案して認められました。」

以上

2002年7月23日
横浜国立大学

□統一テスト実施の目的

評価について教官ごとのばらつきがかなりの程度見られるという事実を反省材料とし、より客観的かつ公平な評価を目指そうという全学的統一見解に達した。

世界的に定評のある TOEFL や TOEIC を客観的尺度とみなすことについては全学的に大方の賛成を得た。

また、本学の学生の英語力が高精度で測定できる。

□ 英語 I の科目

Speaking を1単位、Writing を1単位、Reading/Listening を前期1単位、後期1単位受講。前期の英語 I-R-L は従来のタイプの授業であるが、後期の英語 I-R-L は TOEFL 受験を目標にした授業をする。

□ 統一テストの受験資格認定

統一テストの受験資格認定は、出席率(5割以上)、授業への貢献度および学業成績(小テスト等)を勘案し、授業担当者が行う。

□ 評価: 統一テストのスコアは後期の英語 I-R-L の成績評価に使われる。

評価基準は、後期の英語 I-R-L の担当者を中心とする部会にて決定。

□ 後期の英語 I-R-L を落とした学生の再履修方法

原則として、翌年の前期の英語 I-R-L で再履修する。

□ 受験費用

教養教育予算に組み込み。

第一回横浜国立大学英語 I 統一テスト

○実施準備委員会: 全学英語部会委員(5名) [マニュアル作成を含む企画運営]

○実施委員会: テスト実施日に動員される全教官 [予行演習およびテスト当日参加]

○実施日時: 平成 14年1月30日(水)

午前の部 10:00~12:00

午後の部 13:00~15:00

○使用テスト: TOEFL Level 2 (ITP)(500点以上は測定不可)

○会場・教室: 横浜国立大学 8教室

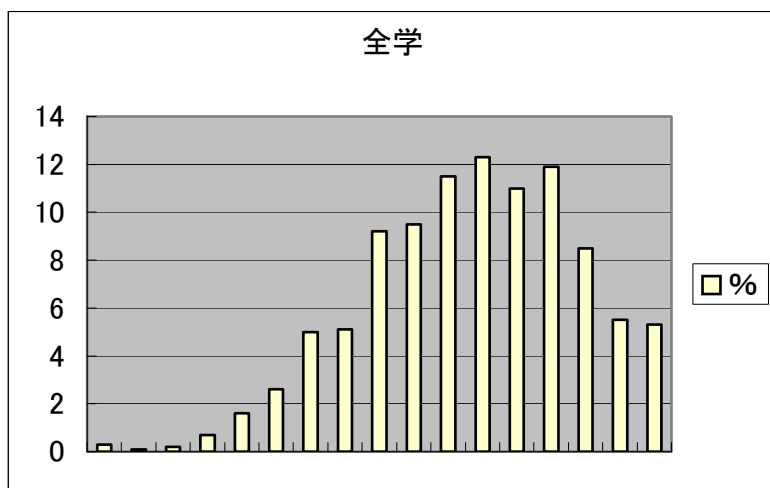
○動員教職員：本部 教官7名 事務官 1名

監督 教官20名(内英語担当教官12名), スーパーバイザー 1名, プ
ロクター 7名, TA(院生) 14名

○受験者： 英語 I を履修している1年生1542名(欠席60名)

○受験率： 96.3%

□ 結果(スコア):平均点(X)を中心とした釣鐘型の分布。



□ TOEFL のスコアの利用方法

・英語 II のクラス編成

・英語 III(Advanced):経済学部のみ専門性の高い, 高度な授業。

1) 英語 I 統一テスト上位者が英語 II をスキップ

2) 入学時 TOEFL550 以上の者が英語 I, II をスキップ

・後期の英語 I-R・L の担当者に担当クラスの学生のスコアをフィードバックする。

(→授業を通しての評価と比較し, 評価方法の改善に役立てることができる。)

□ 受験者を対象としたアンケート実施

・同一試験, 同一評価は良いか? 1.5

・TOEFL 志向の授業は良いか? 1.6

・TOEFL Level 2 (vs. Level 1)は良いか? 2.1

・TOEIC (vs. TOEFL)のほうが良いか? 1.4

・Level 2 の難易度は適当か? 2.0

・他の英語科目より勉強したか? 2.3

■ センターテストとの相関: 0.43

TOEFL-ITP 導入事例(大学の部)

I. 国立大学

I-4. 岐阜大学(所在地:岐阜)

発表者:岐阜大学 医学部 教授 江崎 孝行 氏

1. 導入の経緯

私は英語の専門家ではありませんが、医学部および全学のカリキュラム委員長として様々な教育内容の改革に取り組む中で、英語教育改革にも関わってまいりました。1995～6年頃に新入生の英語教育をどうするかについて大きな議論が起りましたが、当時はまだ教養教育があった時代で、医学部から「会話を中心とした実用的な英語を教育してほしい」という要望を出しても、教養部の英語教員からは「実用的な英語は英会話学校でやればよい。大学の教育としては成り立たない」との意見が圧倒的で叶いませんでした。

それで共通教育とは切り離して、医学部で独自に実用的な英語を教育しようということになり、医学部の専門カリキュラムの中に1～3年次の3年間にわたる英語の授業を取り入れました。最初の年は、英語の専門ではない教官がいろいろな専門用語の授業を企画し実施しましたが、やはり教官の負担も大きく難しいので専任の英語の先生が必要だということになり、2年目から2名の非常勤講師を採用して「医学英語」の授業を始めました。今年で6年目に入ります。

2. 目標

医学部は80名ですので、それを4クラスに分け、20名で授業を実施しています。

まずは、簡単で日常的な家庭用の医療用語、一般の人が分かる用語を使って、自分の体の不調を訴える表現ができる英語力を身につけるのが1年次の目標です。最終的には、医者立場から患者に易しい英語で病気を説明できるようになることを目標にしています。

「医学英語Ⅰ」の単位取得には、①TOEFL(ITP)で500点を取ること ②「医学用語」の試験で60点以上取ること、の2つを条件として課しています。

「医学英語Ⅱ」は、現在は1年生の後期で実施しています。この講座では、TOEFL550点の取得と、医者立場から平易な言葉で患者に病気を説明できるようになるという目標を設定しています。

3. 教材

まだ1・2年生は専門の勉強をしておりませんので難しい医学用語を言ってもほとんど興味を示しません。また専門の教官と一緒に授業するわけでもありませんので、私達はあくまでも平易なアメリカの一般家庭で使われる英語を使って病気を説明する事を目標において教材も準備しました。

一つはTOEFL-ITPの受験が義務付けられていますので、その練習用教材を使います。

もう一つは、アメリカのTVドラマ「ER(Emergency Room)」を教材にヒアリング強化に努めています。導入当時はテープしかありませんでしたが、現在はDVDを用いて非常に効率よく授業を展開できるようになりました。後程内容をご紹介します。

4. 評価

「医学用語」の試験の成績を30%、TOEFLの成績を70%として、総合評価をしています。TOEFL-ITPのスコアは独自の換算表をもとに100点満点に換算した上で、最終成績の70%に組み入れます。

さらにTOEFLで550点以上のスコアレポートを提示した学生には、授業を免除しています。ただし「医学

用語」試験の受験は必須です。実際に550点以上を取って授業免除となる学生は、毎年数名、多いときでも10名足らずです。

成績評価表

ITP	CBT	100点満点	70点満点
677	300	100	70
660	285	98	69
640	273	96	67
600	250	92	64
550	213	85	60
500	173	70	49
480	157	59	41
470	150	52	36
460	140	41	29
410	103	4	3
407	100	1	0
			2002年度

これは私どもが使っている「医学英語」のTOEFLスコアとその換算値です。1年生は500点を目標に設定していますが、500点の換算値は65点になります。それを総合成績100点中の70点にあてると、500点の場合は40数点となります。後は、医学用語の成績で残りの点数(30点)を取れば良いということになります。

学生にとっては、「医学用語」の試験で60点以上取ることは易いようです。「医学用語」はこちらで作成した用語集を一冊渡して、その範囲内でしか出題しませんので、少し勉強すれば学生は満点が取れます。従って、学生は最初から医学用語の点数分は取れたものと考えて、後はTOEFLで何点取ればいいのかと逆算してしまう傾向がありました。その結果、480点くらい取れば大丈夫だということで全く勉強しなかったというのが、最初の頃の失敗でした。現在はその失敗を計算に入れて少しレベルを上げ、後期は550点を目標にしていますので、学生のほうでもやはり多少は勉強しております。

550点が最終目標で、換算表をもとにすると85点に相当します。それを総合成績の7割にあてますと60点になりますので、TOEFLで550点を取った人は及第となります。後は医学用語の試験を受けて60点以上取ればよいこととなります。

我々の換算表の特色は、TOEFL407点以下は0点になることです。600点以上を取る学生は1～2年生のうち1～2名いるかいないかですが、600以上の上位の点数は圧縮して、460～500点くらいの成績で大きな差がでるように傾斜配分しております。

5. 医学用語

最初はまだ各診療科の先生方に「最低限の医学用語を選択して、学生に知ってもらいたいと思うよう

な英語の文章例を作って下さい」と依頼を出してみました。ところが実際に出て来た文例は、専門家にとっては簡単でもまだ医学を勉強していない学生にとっては結構難しい表現も入っていました。一方、精神科の先生方は専門用語をほとんど使わず、実用的な英語が使われますが、私達の意図していた「患者が医者に不調を訴える英語」、「医者が患者に病気を説明する易しい英語」にあたる文例はほとんど出てきませんでした。それで我々の方で文例を少し書き換えて、それを簡単な英語に訳しました。例えば、「昨日荷物を持ちあげたら急に腰が痛くなりました。」というような、患者が日常的に医者に病状を訴える表現です。また医者の台詞の文例にもなるべく専門用語を使わないようにして言葉を選びました。こうして作った用語集を最初は授業に使用しましたが、非常に易しいものですから学生は試験前の2～3日でできるというような考えでほとんど勉強意欲を示しませんでした。そういう訳で、現在は授業では利用せず、学生には、用語集のリストをインターネットで掲示して、学期末にそこから出題するから自学するように案内しています。

6. 授業内容

授業では、教材としてTOEFLの模擬試験用テキストや「ER」のDVDを使い、リスニングを中心とした内容にしています。

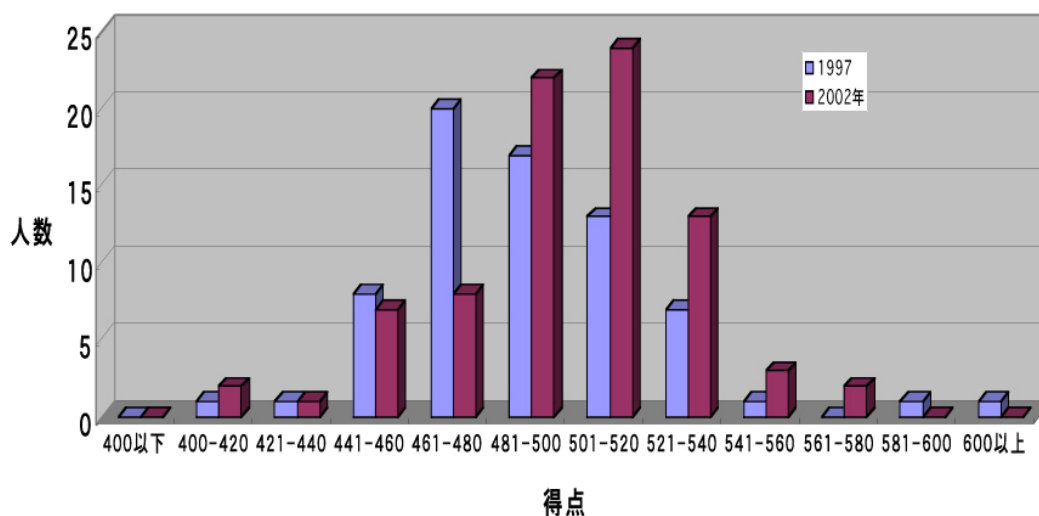
先生によって若干やり方は違いますが、「ER」を教材とした授業例を少しご紹介します。1回目はまず「ER」の場面を聞かせますが、ほとんどの学生は聞き取れません。会話のスピードがかなり早いので、英語の先生でも全てディクテーションするのが難しいことが結構あります。2回目には、会話の文章のどこどこを空欄にした問題用紙を渡して、空欄部分は何と言っているか聞き取って埋めさせるという簡単なテストを行います。3回目に正解を述べて、4回目にDVDの英語キャプションを画面に20～30秒見せて、もう一度簡単なペーパーテストを実施します。先生の説明が終わって、もう一度最後に字幕を見せずに場面を見せると、今度は学生も聞き取れるようになっていきます。そうすると、学生の方もかなり自信がつき、また勉強しようという意欲を見せてくれるようです。

そういうわけで「ER」を教材に使ったのは成功したと思います。最初は普通の市販のテキストを使って授業しましたが、学生はほとんど興味を示しませんでした。「ER」は手術や医療現場の場面が多く、学生には自分の将来に関係したことですから、非常に興味を示しました。まず教材で惹きつけて自信を持たせるという作戦です。実際に週1回の授業では、学生達の英語力がそれほど上達するとは思っていませんので、この授業をきっかけに学生が勉強に対する意欲を出してくれればよいと思っています。

7. 成果

新入生に心構えを教育する合宿セミナーで「ER」のビデオを見せて、「これをパッと聴いて分かるようにならなくては、君達は卒業できないぞ」とハツパをかけています。あまりいい表現ではないかもしれませんが、実際にここ数年くらいは1年の時から英会話学校に通う学生が増えました。1年生というのは、医学部の中では一番時間的に余裕のある時期です。2～3年生になると全科目が必修になってきますので、会話の勉強をする時間がなくなってしまいます。1年から通って、2年、3年と進むうちに減ってくるかと思いましたが、全体的には5年生頃まで通い続ける学生が多いようです。

TOEFL成績 (1997/2002)



上図は1997年度と2002年度の学生のTOEFLスコア分布です。1997年度の学生の最多得点帯は初回が大体461～480点辺りで、回を追うごとに480～500、500～520と推移しています。また2002年度の成績は、それより更に右にシフトしており、480～500から始まって、次が500～520のあたりがピークになっています。これで明らかなように、1997年に比べれば、確実に成績が上がっています。

これは授業の成果というよりは、学生にTOEFLや英会話を勉強しなければならないという動機付けに成功したのではないかと思います。特にここ2年くらいは学生がよく勉強するようになりました。この制度を導入してから英語の成績のために留年する学生はほとんどいませんでした。そうすると、特に勉強しなくても普通に勉強していれば点数が取れるんだという安易な考えが先輩から後輩に引き継がれていきます。ところが、この3年間で6～8名程度が英語を落として留年し、ようやく学生にも真剣さが出てきました。今年は、英会話学校に通う学生も多いですし、1回目のTOEFL-ITP受験者も100%だったということで英語の先生も喜んでます。明らかに勉強していないと分かる学生に再々試験を実施してあげるようなことはしないほうがいいということです。TOEFL受験は必須ですが、「医学用語」の試験も再試験は1回のみというのが医学部では規則で決まっています。どのような理由があろうと再々試験は行いません。そうすることがようやく学生にも浸透してきて、勉強するようになったと思います。TOEFLの成績と「医学用語」の成績を比べてみますと、留年する学生は明らかに「医学用語」の勉強をしていません。100点満点が取れるのに努力をせず落とす学生もいて、本人も後悔しているでしょうが、やはりむやみに甘くしてはいけないのだと思います。

<Q&A>

Q1: 今でもやはり英語科の教員の方はこのような実用的な英語教育への取り組みに関わっておられないのでしょうか。

A1: 今では教養部の方でもTOEFLを使おうという気運になっており、実用的な英語を教えることがここ数年の流れになっています。実際に、共通教育課程ではTOEFLで500点以上を取得した学生には授業免除するなどしております。世の中の流れが実用的な英語教育を奨励する方向に変わってきたことが要因ではないかと思います。

Q2: 最近、大学生の学力低下が叫ばれていますが、TOEFLのスコアから見て年度毎の新入生の英語力に変化はありますか。

A2: 最初にTOEFL-ITPを受験させるのが6月ですので、入学時の英語力は厳密には分かりませんが、6月のスコアを較べる限り年度毎であまり変わらないように思います。

Q3: 医師と患者の会話を重要なプログラムに入れておられますが、それにはどのような意義があるのでしょうか。「国境無き医師団」のような国際活動に従事することも念頭に置いておられるのでしょうか。

A3: いろいろな場面が設定できるかと思いますが、今は教材集めという段階です。

以上

1. 医学英語導入の背景と現状

岐阜大学医学部では1994年ころから、医学英語の必要性を訴え、教養部の英語教官に教育改革を申し入れたが、要望がきき入れてもらえなかったため、教養課程の英語以外に医学部で独自の医学英語の授業を立ち上げることになった。1996年度から医学部の学生にクラスを2つに分け(40人ずつ)医学英語を1年生と2年生に開講した。導入当初は専任教官がないので医学部の教官で代用し、教育を行ったが、後に2名の非常勤講師を確保し、一クラスを20人の体制で授業を行う環境を数年かけて作成した。教育目標は1年目でTOEFL500点以上、会話を医療の画面に設定し、自分の体の不調を一般的な家庭医学用語で医師に正確に伝える実用的な英語を身につけることを目標とした。2年目はTOEFL550点以上、医師の立場から患者に疾病を家庭用の医学英語でわかりやすく説明する場面を設定し、専門用語の入門教育を行うことを目標にした。

現在はカリキュラムの編成上、一年生の前期と後期の専門教育枠で医学英語を実施しており、共通教育の英語とは全く別の目標を設定して授業を行っている。

2. 教育内容

90分週一回の授業で15回

- 1). TOEFLの練習問題
- 2). ERのビデオを使った hearing の訓練
- 3). 医学用語: 授業では取り上げず、ネット上に課題を提示し試験だけを行う。

授業で時間をとり実施しているのはERのビデオの hearing 訓練

3. 評価方法

TOEFLの成績を70%、医学用語の成績を30%として総合判定

(TOEFLの成績が550点以上のものは授業を免除し、医学用語のテストだけを受験させる。)

TOEFLの得点を独自の方法で100点満点に換算(400点で0点、550点で65点)

4. 授業の進め方

当初は医学用語の授業をおこなっていたが学生はあまり興味をしめさず、教官は苦勞した。そこでERのビデオとDVDを購入し、授業はERの hearing を中心に展開したところ学生は興味を示すようになった。学生にはERのビデオを繰り返し見せ、会話の内容を授業中に paper test でチェックした。DVDは始めは字幕無しでDVDを見せ、3回目には日本語の字幕、ついで英語の字幕をみせる。最後に字幕無しで見せると多くの学生は会話がほぼ理解できるので自信をもつようになる。

5. 反省と進歩

当初は成績別にクラス分けを行ったが成績の悪いクラスでは、授業に興味を示す学生が少なく、逆効

果と判断し初期の2年で成績別の編成は中止した。適度に出来る学生を混在させることで、刺激を受けるのではないかと判断した。

医学用語は最初の2年は授業で発音、イントネーション、語源等の教育を行ったが、学生の大半は興味を示さなかったため、ネットに教材を提示し、試験範囲を独自で勉強する方式に切り替えた。学生は一度正解を見るとほぼ完璧に英語で表現できるようになるので、授業で医学用語の授業を行う必要はないと判断した。医学用語の時間を切り、ERを使った hearing 授業には学生が興味を示し、授業中に何度もERのビデオをみせているうちに、自信を与えることが出来た。

導入の最初の5年間では単位を落とす学生は1-2名であったが、2年前に勉強意欲を示さない6名が留年した。これをきっかけに学生には危機感がでて、真面目に勉強するようになった。特に今年度は前期の段階でほぼ6割の学生が500点以上を獲得している。

6. TOEFLの受験

自主的にTOEFLの試験を東京・大阪に受験に行く学生は少ないので、前期(6月)、後期(12月)にそれぞれ一回ずつ模擬試験を受験させ、その成績をTOEFLの成績に代用するようにした。ほぼ100%の学生がこの模擬試験を受験し、東京、大阪に試験を受けに行く学生は毎年数名に過ぎない。入学した段階で550点以上の成績を提示し授業を免除される学生は80人中、毎年5名以内程度にとどまっている。

以上

TOEFL-ITP 利用事例(大学の部)(必修講座履修要件)

I. 私立大学

I-1. 中央大学(所在地:東京)

発表者:中央大学 総合政策学部助教授 黒田 絵美子 氏

私どもの学部は創設されて今年で 10 年目を迎えますが、中央大学の中では比較的小規模の学部で、政策科学科と国際政策文化学科という2学科があり、1 学年の人数は 250 名です。創設当初から英語のクラス分けの手段として TOEFL-ITP を利用しております。

本日のトピックは「必修講座履修要件としての ITP」ということですが、簡単にクラス分けの方法についても紹介させていただきます。A~D の4レベル構成で、最もレベルの高いDレベルと最もレベルの低いAレベルが各 3 クラス、中間の C レベル・B レベルは各 4 クラスで、合計 14 クラスに分けております。最上級の D1 クラスは、TOEFL で 600 点を超える学生が集まり、海外経験のある学生がほとんどです。ネイティブスピーカーの英語教員が普通に話しても何の支障もないといったクラスです。反対にAクラスの方では、日本語の全く分からないネイティブの教員が授業をするとお互いに戸惑ってしまうような形で、TOEFL で 380 点あたりから 400 点前半まで停滞している学生が多いかと思えます。

TOEFL-ITP を使って 10 年になりますので、この間の歴史をお話するととも 20 分では終わりませんが、本日お集まりの先生方が一番ご関心を持たれる事は、必修講座の履修要件として ITP のようなものを使っていいのだろうかということではないかと思えます。大学の単位を与える、あるいは大学の卒業の要件として ITP が絡んでいいのだろうかというご質問が出るのではないかと覚悟しているのですが、この点は学部でも常に議論の的になるところで、まだ試行錯誤の途中です。本日のところはその利用の是非を語るのではなく、実際、実施している側として感じている良い点や問題点をできる限り率直にご紹介していけたらと思えます。

履修要件としての利用

具体的に必修講座の履修要件としてどのように使っているかご説明します。二つありまして、一つは3年次または4年次必修の「上級英語」を履修する条件として、TOEFL500 点を必要基準にしております。500 点取れていないと「上級英語」が履修できません。本学部では、1・2 年で 3.5 コマの英語の必修があります。内容としては、Writing、Reading、Listening が各 1 コマ、その他に、学生が先生やテーマを自由に選べる選択英語というものを課しており、それが 0.5 コマとなります。この 3.5 コマを 1・2 年生で履修すると、その先のステップとして 3・4 年のどちらかで「上級英語」を取るようになります。この「上級英語」は、社会学や女性学など様々な専門性を持った教員が、その特色を生かして専門の分野について英語を使って授業をしていくというものです。3年生までに TOEFL500 点に達していない場合は4年生で取ればいい訳ですが、最終的な救済手段として4年生の後期に週に2回の集中型講義をしますので、遅くとも4年の夏の終わりまでに 500 点を取れば、その後期開講の上級英語に間に合って普通に卒業できるようになっております。

昨年までずっとこの形で継続してまいりましたが、本学部に入ってくる学生には少なくとも TOEFL500 点くらいは早くクリアして、その先の学習をしてもらいたいという当初の目的に反し、4年の夏までに取ればいいということで、怠ける学生はどうしてもぎりぎりまで怠けてしまうという問題点がございました。つまり、スタートとして設定したはずの「TOEFL500 点」がゴールになってしまう傾向が見られてきましたので、

この4月から新しいルールを適用することになりました。

二点目のこの新しい基準では、3・4年次必修の事例研究、通常「ゼミ」と呼ばれているものの履修要件として同じく TOEFL500 点を設定しました。つまり、2年生の終了時までには 500 点をクリアしていないとゼミが取れないことになり、これはかなり学生にとっては辛い条件のようです。この春辺りはゼミに入れるかどうかということで学生たちはかなり緊張しておりました。実際データとしてお役に立つかどうか分かりませんが、今春の段階で残念ながらゼミに入れなかった学生は 250 名の中の約一割でした。これを多いと見るか少ないと見るかは難しいところです。この一割の人数の中には休学している学生もおりますし、全く勉強せず他の単位も取れているかどうか分からない学生もおります。

ITP の実施時期

一年間のうちで、学部主催の ITP は3回実施しております。4月の ITP はクラス分けのために実施し、その後、7月の下旬と1月に行います。これらは、学部で受験料を負担しており、学生の費用負担はございません。また、これは全員受験が義務付けられておりました出席も取ります。本学部では英語の出席についてはとても厳しく、年間6回以上休むと自動的に不可になってしまいます。ITP を休むと欠席1回に数えられてしまいますので出席率はかなり良いです。この他に、受験料は受験者負担になりますが、希望者対象の ITP を11月に一回行います。また、中央大学生協主催の ITP もございます。

学部主催の実施の場合は1年生用と2年生用を午前と午後に分け、それぞれ別のテストフォームを使いますので、希望すれば両方のテストを受けることもでき、一日中 TOEFL 漬けという学生もおります。これらを利用すれば受験のチャンスは十分あるのではないかと思います。また、もちろん International TOEFL も有効ですので、大学外で受験して、500 を超えたスコアを提示すれば有効ということになります。

課題

しかし実際には、なかなか500点に達することができない学生もおります。学部の英語教育の理想としては、TOEFL は日頃の英語教育の成果を測るテストであって、TOEFL の為に勉強するという事はあってはならないと最初のうちは皆そのように思っていました。特にネイティブの先生は非常に合理的で、「これは英語力を測るためのテストなのだから、そのために勉強してしまったら能力が正しく測れないじゃないか」と言われます。学部開設当初は、英語の授業が週に5コマあり、その内 Listening と Reading が2コマずつありました。その他に一番下のAクラスに対しては、もう1コマ英語の補習クラスが必修で加わり、計6コマありました。それだけの授業を受ければ、TOEFL の問題集を解かなくとも500点に到達できるのではないかと最初は思っていたのです。が、実際にはなかなかそういうわけにはいかず、TOEFL のための授業を何かしらしていかなければいけないという必要性を感じるに至りました。TOEFL 対策の授業である TOEFL 講座と英語演習というものを2つ置きまして、これは純粋に TOEFL の訓練のための授業としました。しかし、英語の必修授業の出席が非常に厳しいのに比べて、この2つの TOEFL 対策クラスは本人の自主性に任せますので、最初のうちは良い出席率もだんだん落ちてきます。TOEFL の訓練を大教室で一斉に行うということには限界があるなということを感じました。

次の手段として、個人が自分のペースで自分の課題を自覚しながら勉強すれば一番良いと実感しましたので、TOEFL の様々な参考書や問題集を設置したリーディングルームを設けまして、学生が空き時間にいつでも勉強できるようにしました。TOEFL-CBT(コンピューター版 TOEFL)の導入に伴い、数年前

に英語用のコンピュータールームも作っていただきました。そこでコンピューターを使って英語教材で独習するシステムも作っております。

少し過保護ではないかと思われるかもしれませんが、TOEFL のスコアによって卒業の可否が決まるという条件を課す以上はやれるだけのことはしてやらなければと考えております。

しかし、勉強しない学生というのは気にしながらも絶対に勉強しないものです。常に教師としては今学生がどのような状況にあるかをきめ細かく見ていかないと、さぼる学生は限りなくさぼってしまいます。いずれ卒業できなくなる、いずれゼミが取れなくなるということが分かっているにもかかわらず怠けてしまうので、そうなる前にまめに声をかけて細かく目を配ったり、時には脅したりしないといけないのが現状です。

効果

もちろん優秀な学生はそのようなことをしなくとも留学や大学院進学目的があつて、そのためにどんどん勉強してプリンストン大学やケンブリッジ大学にいく学生もおります。それから卒業後国際機関で働いているものもおります。

想定していなかった効果としては、英語だけではなく他の言語の習得に対してもかなり意欲的になったと思われることです。他学部の学生と較べると、語学に関しては億劫だと思わずに率先して勉強する傾向があるようです。若干ですが、フランス語や中国語を一生懸命勉強してフランスや中国で就職している学生もおります。

就職に関連して申し上げますと、在学中は A クラス(一番下のクラス)で非常に苦しんで、「なんで TOEFL の基準なんてあるの？」と文句ばかりいっていた学生が、卒業してから会いに来まして「入社後すぐに英語を使わなければならない状況になりましたが、拙いながらも話すことができ、英語を生かした仕事をしています。学部で非常に厳しい英語教育を受けて良かった」とお礼を言われたことが何度かございます。それから就職先の人事課の方からも本学部の学生は英語に関しては信頼がおけるというお言葉もいただいております。

アドバイス

私どもは TOEFL をプレイスメントや必修講座の履修要件として使っていますが、それが果たしてベストなのかどうかはまだ何も申し上げられません。毎年同じ形ですと続けてきたわけではなく、途中大きなカリキュラム改正をしまして、毎年微調整を加えながら続けている状況です。ただ、もし、これから本学部のような形で TOEFL を実施しようとお考えの先生方がいらっしゃいましたら、一つご参考にして頂ければと思うことは、例えば TOEFL 500 点を 2 年の終了までに取らなければならないというルールを決めたら、それは必ず守られる事です。学生の名前を見ずにスコアだけを見れば 500 点のところを引けるのですが、名前を見てしまい、しかもよく知っている学生で 497 点であったりすると、まあ 3 点くらいいいじゃないかという気持ちになってしまいがちです。そうすると 496 点以下はどうなるのかとなってしまう。TOEFL を 3・4 年必修の上級英語の履修要件としていた頃、4 年生で、就職も一流の会社に決まっていて、後は TOEFL の点数をクリアするだけとなった場合に、救ってあげたいなという揺れたりもしました。これは一人一人のことを考えれば、英語はできなくても中国語はこれだけできるのだからいいのではないかという判断の仕方も勿論できると思います。もし適正な基準を定めて判断できればいいのですが、少なくとも 200 人を超える学生を抱える中でそういったルールを決められた場合、非常に辛いことですが、

決めたルールは守らなければならないという風潮をつくっていかないと実施する上で非常にやりにくいものがございます。また、一度決めて皆に申し渡した事を途中で取り下げたり、変更してしまいますと不公平感が残って後味が悪いものです。これらは私共の苦い経験から申し上げることで、ご参考になれば幸いです。

<Q&A>

Q1-1 「筑波大学の久保田です。Reading や Listening などのセクションのうち、学生が一番伸びる力というのは何か特定できるものがあるかということをお聞きしたい。」

A1-1 「努力次第で一番伸びやすいのは文法セクションですね。また、珍しい例かもしれませんが、夏に海外へ行き、帰ってくると急に Listening が上がった学生もちらほらおります。」

Q1-2 「それからもう一つ、やはり評価というのはカリキュラムと密接な関係がなければならないと思いますが、普通に授業をしていて、TOEFL-ITP で測定できる能力も上がるのではないかという予測に反して実際にはそうならなかったというのは、どういう原因があるのか。その分析をなさったかどうかを伺いたい。」

A1-2 「一言でいいますと、やはり TOEFL の出題のパターンを訓練した人としらない人では、訓練してから受けた人の方がスコアが良いことは確かです。」

Q1-3 「ITP 対策の授業を実施されているということですが、それは英語のコンテンツについて授業をされているのか、それともテクニックの授業をされているのかを伺いたい。」

A1-3 「後者の方です。過去の問題を解かせたり、Listening のテープを何度も聞かせて発音させたりと、本当にテクニックを伝授するものです。」

Q1-4 「やはりそういうことをしないと、普通の英語の授業をやっただけでは得点に表れるような形、ないしは ITP で測定できるような形での成果というのは得にくいということなのでしょうか。」

A1-4 「それはもともとのレベルによると思います。最上級のDレベル3クラスは最初から500点を超えておりますが、Cレベルの4クラスくらいも、普通の授業を受けていけば自然に伸びていきます。問題は下半分のA・Bクラスです。この辺りのクラスでは400点代前半の学生が多いのですが、450点以下の学生に関しては訓練をしてあげないと伸びる事は難しいかと思えます。」

Q2 「駿河台大学の佐野 富士子です。黒田先生の学校ではパソコンを使っての英語独習プログラムを使っていらっしゃるということですが、本学にもCI教室がありまして、そこでの自学自習と英語の授業とをリンクをさせようということで、数名の有志でプロジェクトを立ち上げたばかりです。プログラムをパソコンにインストールしておけば、後は学生が自由に出入りして使えるものなの

かどうか、または CD-ROM を貸し出しするのかどうか、それから運用面のご苦労をお聞かせいただければと思います。」

- A2 「先程申し上げたリーディングルームとコンピューター学習ルームは、学部図書館の奥にございますので、中のものを許可無く持ち出したりすると、図書館出入り口のチェック機能に引っ掛かることとなります。その部屋の管理にはアルバイトの人を雇っておりまして、部屋の利用や教材の貸し出しの際には登録するシステムになっております。使用しているプログラムは、この春まで 2 年間試しに無料で利用できるという「グローバルイングリッシュ」を使っておりました。結構学生は好んで使っていたようですが、この度無料利用の期限が切れましたので、今春より DynEd(Dynamic Education)のものを使っております。

以上

2002年7月23日

中央大学 総合政策学部助教授 黒田絵美子

発表内容梗概

(ITP を導入した経緯)

総合政策学部創設当初、政策、文化、情報、英語を学部教育の「四つの柱」として打ち立て、理論のみならず実践として情報機器と英語を自由に使いこなし、従来の学問領域の枠を超えて政策と文化の融合をめざすような学問を身につけてほしいとの願いをこめて、英語の学力に一定のハードルを設ける必要性が教員たちの間で唱えられた。当初、学部英語教員作成による独自の統一試験を試みたが、学生たちの英語力を正しく把握するのに適当かつ公平な問題を作成することの難しさを実感。そこで、英語のクラス分けのためすでに導入していた ITP を「必修講座履修要件」としても利用することにした。越えなければいけない基準点は500点と定めた。これは、努力をすれば誰もが無理なく越えられるハードルであると判断されたためである。

(ITP 実施状況)

4月に英語のクラス分けのための ITP を実施、その後、7月下旬、1月に学部主催の ITP を実施している。費用は学部が負担し、学生は全員受験することが義務づけられており、当日は出席を取る。本学部では英語の授業において、通年で6回以上欠席すると自動的に単位を落とすことになるので、ITP 当日の出席は学生たちにとっては重要な意味を持つ。

年間3回の学部主催 ITP の他に、希望者が実費負担で受験する ITP を11月に行っている。また、中央大学生協主催の ITP(有料)もあり、これらのスコアも有効なので、学生たちがその気になれば、受験のチャンスは十分にある。

(ITP 対策)

学部創設当初の ITP に対する考え方は、「TOEFL はあくまでも日頃の英語学習の成果をはかる手段であって、TOEFL 受験のためになんらかの訓練をする必要はない」というものであった。実際、創設当初、本学部では英語の授業が週に5コマ課せられていた上、ネイティブ教員による教育も充実していたため、学部の授業をきちんと受けていれば着実に英語の学力が上がっていくと思われた。しかし、数学受験で合格した学生など、英語があまり得意でない学生たちにとっては ITP の得点を向上させることは予想以上に困難であったことが次第に判明、また、カリキュラムの都合上、英語のコマ数を週3.5コマに減らざるを得ない状況が生じたため、「TOEFL のための」授業を置く必要性に迫られた。

そこで、現在は「TOEFL 講座」「英語演習」という自由選択講座を設けて ITP 対策の補習を行っている。その他、リーディング・ルームという部屋を設け、TOEFL の問題集や CD、カセットテープなどを置き、学生がいつでも自習できる環境を整えている。さらに、パソコンを使っている英語独習プログラムも導入し、専用の部屋を設けている。

(今後の課題)

・理想的には、ITP を履修要件にしなくても学生たちが自覚を持って学習を進め、500点に到達してくれることが望ましい。現在は、英語が苦手な学生にとってはかなりのプレッシャーとなっているようで、落第したくない一心でなんとか勉強している学生も少なくない。

・早い時期に500点に到達した学生、努力の末500点に到達した学生ともに、さらにその上を目指してほしいというのが教師の望むところである。もちろん、海外の大学院を目指す学生などは600点以上を目指して努力しているが、ともすると、500さえ越えればという雰囲気になりがちである。これを払拭して、学生たちに向上心を持たせる手立てが模索される。

・CBT 対応対策が急務である。これまで教員も学生も筆記式に慣れているため、CBT に関する情報を取り入れ、徐々に切り替えていかなければならない。

TOEFL-ITP 利用事例(大学の部)
(ランゲージ・プログラム・モニタリング)

II. 私立大学

II-2. 関西学院大学 (所在地:兵庫)

発表者:関西学院大学総合政策学部 Dr. Steven John Ross
(発表は英語で行われました)

1. 関西学院大学総合政策部における講義

関西学院大学の総合政策学部では経済学、健康科学、環境衛生学、海岸生態学、人間生態学、経済開発学、社会言語学、コミュニケーション論、言語教育学、言語学、言語政策論、比較文化論、情報科学、メディア社会学の分野において 50 以上の講義やセミナーを英語で行っています。更に、これらのコースはイギリス、カナダ、香港、ベトナム、ドイツやアメリカからの国際色豊かな教授陣により教えられています。

2. 関西学院大学総合政策学部のランゲージ・プログラム

ITP 使用している英語コミュニケーション・プログラム(ECP)は 5 セメスターで 18 単位を与える研究目的のための英語カリキュラムで、必須科目の英語コミュニケーション・コースは学生のレベルや学期によって編成され、標準的な学習要綱と評価基準を採用しています。

3. 試験の目的

3-1 ITP によるクラス分け試験

英語コミュニケーション・コースを履修する全ての学生は新入生オリエンテーションのある最初の一週間目に ITP を受け、学習速度と学習焦点が異なる 3 レベルの英語コミュニケーション・コースのうちの一つに割り振られます。また、中国や韓国の学生に対しては基礎英語コースへの入学のためのプレースメントテストとしても利用しています。更に、日本語を母語としない学生で ITP スコアが日本人学生の平均値より標準偏差がマイナス 1 以上のものは(つまり ITP スコアが日本人学生の平均値より多少低くても)基礎英語コースではなく英語コミュニケーション・コースを履修することができます。

3-2 クラス分けの基準(例外的措置)

ITP のスコアが 530 点以上の新入生は英語コミュニケーション I と II は免除され英語コミュニケーション III と IV に割り振られ、英語コミュニケーション V の選択科目であるテーマ別に分かれたコンテンツのコースか教師教育コースの科目を履修することもあります。

3-3 到達度評価(学習者が特定のコースまたはシラバスからどれだけ学んだかを評価)

それぞれのコースの目標にたいする達成度を測定する基準は各コースのコーディネータと教師チームにより設定されている。評価は、出席、宿題、自己評価、クイズの結果、クラスメートによる評価、プレゼンテーションもしくはプロジェクトによりなされます。

3-4 熟達度試験(学習者の一般的な言語習熟度を測定する試験)

学生の英語熟達度は、ITP により英語コミュニケーション II と IV のコース終了時にそれぞれ測定され

ます。ここでは、ITP の総合得点を利用するのではなく各セクションのサブスコアを利用します(総合得点はクラス分けの時にのみ使われる)。

4. 熟達度-到達度 モニタリング

英語コミュニケーションプログラムのそれぞれのグループは四学期にわたって、全ての ITP スコア、出席、宿題、自己評価、クイズの結果、クラスメートによる評価、プレゼンテーション(研究発表)もしくはプロジェクトの評価に基づき成績の動向をモニターされます。これは、熟達度試験(ITP)のスコアと到達度評価の相関関係を考察し、その両方の観点から英語コミュニケーション・プログラムを評価し、シラバスやカリキュラムの改善を試みるためです。

モニタリングの課程

4-1 ステップ1

英語コミュニケーションコース開始時の ITP 各セクションのサブスコア(リスニング、リーディング、ストラクチャ-)と一学期終了後のリスニング・ノート・テーキングの成績(L1)、プレゼンテーション(研究発表)の成績(P1)、リーディングの成績(R1)、そしてライティングの成績(W1)の間の相関関係を考察します。

4-2 ステップ2

英語コミュニケーションコース開始時の ITP 各セクションのサブスコアと英語コミュニケーション I のコース終了時に与えられた到達度の評価であるリスニング・ノート・テーキングの成績(L1)、プレゼンテーション(研究発表)の成績(P1)、リーディングの成績(R1)、そしてライティングの成績(W1)、と英語コミュニケーション II のコース終了時に与えられた到達度の評価、つまりリスニング・ノート・テーキングの成績(L2)、プレゼンテーション(研究発表)の成績(P2)、リーディングの成績(R2)、そしてライティングの成績(W2)の間にどのような関係が存在するのかを考察します。ここでは、学生が英語コミュニケーション・プログラムに入ってからの二学期間にわたる成績の動向をクラスに入った時の熟練度を考慮にいれながら考察します。

4-3 ステップ3

英語コミュニケーション II のコース終了時(最初の学年の終了時)

そして、英語コミュニケーション II のコース終了時(一年目の学年の春と秋学期の二学期終了時)に再び ITP を実施し、ITP のそれぞれのセクションのサブスコアをステップ2のモデルに加え学生の一学期からの二学期間の成績の動向を熟練度試験の結果と到達度評価の成績の関係より考察します。つまり、コース開始時の熟練度を考慮に入れながら英語コミュニケーション II のコース終了時に実施した ITP 各セクションのサブスコアと英語コミュニケーション I と II のコース終了時に与えられた到達度のそれぞれの評価、つまりリスニング・ノート・テーキングの成績(L1・L2)、プレゼンテーション(研究発表)の成績(P1・P2)、リーディングの成績(R1・R2)、そしてライティングの成績(W1・W2)の間にどのような関係が存在するのかを考察します。このようなプロセスを繰り返して各グループ(入学年度別)の四学期にわたる熟練度と到達度の関係を表すモデルを完成し、それらの間に重要な関係が存在するか否かを考察してシラバスやカリキュラム改善のための情報を得ます。

5. 結果と考察

5-1 リスニング

ITPに向けてのテスト対策としての特別な授業を行っていないのに学生のリスニングの熟達度は学期をおうごとに改善されていることがわかりました。この理由としては、全てのコースが英語で行われていると言うことが考えられそうです。つまり、学習言語を使った直説法による教授は(英語を媒介語とするコース)リスニングの能力を向上させるといえます。

5-2 リーディング

リーディングのセクションはリスニングのようなわけにはいかず、学習者の二年目のスコアは一年目と比べて向上しておらず平行線をたどったグループが多かったです(1995年入学グループから2000年入学の六グループのうち四つのグループが平行線をたどった)。これは、リーディングのコースで教える事項がプレゼンテーションのコースと重複してしまっていたりして、本来リーディングのコースで教授すべき事項がきちんと教えられていないと言うところに原因があるようです。この結果をもとにシラバスの改善を試みたところ2000年入学のグループの熟練度は学期をおうごとに向上してきました。

5-3 ストラクチャー

ストラクチャーのセクションのスコアは各グループによってかなり異なり学習者の二年目のスコアは一年目と比べて向上しているグループもあれば、減少しているグループもあります。更に、結果の解釈を困難にしているのは、1995年入学のグループは一年目より二年目のほうがスコアは少し向上しているのに1996年入学のグループはスコアが一年目より減少していて、1997年入学のグループは平行線をたどり1998年入学のグループは向上したかと思ったら、また1999年入学のグループは二年目のスコアが減少しているという事実です(本来であれば、前年度の結果をもとにカリキュラムの改善がおこなわれ、それによって年をおうごとに一年目より二年目のほうがスコアが向上してもおかしくないはずです)。英語コミュニケーションのコースは、文法を教えているわけでもなく学習者の母語も使わないので、どうやらストラクチャーのセクションに代表される文法はコースの中で偶発的に学習されているだけのようです。そして、これでは不十分であるということがいえそうです。おそらく機能ばかりでなく、もっとフォームに焦点を当てたり、学習者にフィードバックを与える(たとえば理解できても学習者の誤用を訂正する)ことも大切なことなのでしょう。

6. おしまいに

以上、ITPを利用して熟達度試験(ITP)のスコアと到達度評価の相関関係を探り、学習者の成績の動向をモニターすることにより、学生の入学規定の改善を試みる情報を提供できるばかりでなく、シラバスやカリキュラムの改善につながる形式的フィードバック(formative feedback:よりよいカリキュラム開発やシラバス編成のために提供される情報)をも得られます。更に、四学期にわたる学習者の成績の動向のモニターは短期間のモニターでは得られない、適切な評価に必要な多くの形式的フィードバック(formative feedback:よりよいカリキュラム開発やシラバス編成のために提供される情報)を与えてくれます。

(日本語訳)川手-ミヤジエエフスカ 恩/テンプル大学ジャパン助教授

TOEFL-ITP 利用事例(大学の部)(プレースメントテスト)

II. 私立大学

II-3. 西南学院大学 (所在地:福岡)

発表者 : 西南学院大学 文学部 教授 古屋 靖二 氏

1. 導入の経緯

西南学院大学文学部英文学科では、近年、大綱化見直しに添って社会の要請に応えるカリキュラム改正の検討を重ねました。特に社会の要請という点は、学生の英語運用能力の一層の向上を目指すことを本学科の教育の主要な柱の一つにするという機運が高まりました。現在、日本の大学の英文学科というのは非常に斜陽な学科の一つであり、なんとか立て直しをしなければなりません。どのような受講科目を提供することが学生にとって魅力的かが大きな課題となっており、この主要な柱の一つに英語運用能力の一層の向上を目指そうと考えました。もちろん、今までこのような科目がなかったわけではありませんが、更に力を入れるということで検討を重ねてきました。

参考までに付け加えますと、残り二つの主な柱は英米文学と英米文化になります。全国的な傾向かと思いますが、英文学だけでは学生が集まらないということもあり、英米文学と英米文化、そしてこの英語運用能力の向上を教育の柱としております。

具体的な方策として、英語運用能力の向上に特に必要とされるスピーキングスキルの充実をはかるために、1998 年度より能力別クラスを設けて実施しております。その教育効果をあげる必要性から、TOEFL-ITP をプレースメントテストとして導入することになりました。

授業のプレースメント以外にも、ITP の導入には次のような目的もあります。

西南学院大学では、アメリカ、カナダ、イギリスなど英語圏の大学と学生交換協定を締結し、相互に学生交換を実施して 30 年以上経ちます。協定校との話し合いで、派遣留学生に必要とされる TOEFL スコア基準点が学内で設定されておりますので、派遣の第1次選考として TOEFL-ITP のスコアではかる事にしています。この基準を通らないと 2 次選考の在学成績、小論文、面接には進めません。

その他にも、大学主催の語学研修や、協定校や私費での英語圏への留学の機会がいろいろあります。日頃から英語圏への語学研修や留学の機会が、専攻の英米文学・英米文化の興味を一層深めるきっかけになることを英文学科の学生には認識させ、これを奨励しております本学科としては、TOEFL スコアが低いために第一関門を通過できず派遣できないということのないよう、できるだけ多くの本学科学生に定期的に ITP を受験させる方策が取られることになりました。

2. 実施状況

このような理由から本学科では 1999 年度より ITP を導入いたしました。最初の 2 年間は、スピーキングスキルクラスのプレースメントテストとしてそれまで使用していた本学 LL 作成の簡単な 15 分程度のテストと併用した試行的実施としましたが、その後 ITP のみで十分であると判断し、プレースメントテストとして ITP を実施しております。

特に 1 年生には、2 年次で必修科目となるスピーキングスキル、更に今年度からリーディングスキルのクラス分けのために強制的に受験を勧めることが可能になり、その分、受験者数も伸びました。初年度

は 1 回のみの実施でしたが、2000 年度より本学 LL 教室を利用して、4～5 名の本学科教員の協力を仰ぎ、年 2 回、6 月と 12 月に実施しております。

受験料は、普通の TOEFL が 13,000 円程度かかるのに対し、その 10 分の 1 以下の安価な受験料を設定し、実施の度に学生から徴収しております。各回の受験者数によっても金額は変わりますが、大体 500～1000 円という無料に近い受験料です。これには毎年大学から各学科に支給される「特色ある学部・学科教育実習経費」を ITP テスト実施の補助金に充当し、英文学科として少しでも受験生の負担を軽くしようという方策を採っております。

受験者の傾向を学年別に見ますと、プレイメントテストとしての実施が主たる目的のために、1 年生が毎回強制的に受け、全受験者の 60～70%程度を占めております。残りの大半が 2 年生で、3・4 年生は基本的に少ないのが現状です。

3. 成果

1999 年から実施し、英語学科全体として ITP の平均点は回数を追うごとに徐々に上昇傾向であることが分かり、実施の成果は出ていると考えております。これにより、大きな目標である英語運用能力のレベルアップは達成されつつあるものとも見ております。

2001 年には前年と比べて、英文学科の全体的な平均点が約 6 点下がったケースがございました。異例のことですが、原因として受験者を占める大半の 1 年生が 6 月の初めての試験に戸惑いを見せたことが関係しているのではないかと思います。つまりテストで結果を出すには慣れも必要で、回を追う毎に点数が上がっていくのは、試験に慣れて実力が出せる学生も増えてくることも要因だといえます。もちろん、毎年の新入生の英語力に差もあるでしょうから調べてみますと、やはり平均点が 6 点下がった年の入試英語の点数は 10 点強の差がありました。入試の難易度は年によって異なりますので要因は一概には申せませんが、いずれにせよ、全体的に平均点が前年より下がるということが全くなかったわけではありませんでした。

4. 今後の課題

今後の課題としてまず考えられることは、西南学院大学の英文学科として、学科全教員の協力体制でできるだけ受験者数の増加をはかることです。1 年生が大半で残りは 2 年生が多く、3・4 年生が少ないという現状ですが、何とか受験者数を増やすことはできないかと考えております。3 年次の授業のプレイメントテストとして 2 年生にも ITP 受験を必須とする体制を検討すべきという案もございまして、近いうちに話し合いの段階に持っていかれると思います。ただ 3 年生のクラスはスピーキングスキルやライティングスキルがありますが、必修ではなく選択授業ですので、全員強制的に受験させることには問題もあります。

3・4 年生の受験者数が少ないのは、就職を意識して TOEIC の方に興味を示す傾向があるためということもあります。留学は大抵 2 年生で受けて 3 年生で行くパターンが多いので、どうしても TOEFL はクラス分けと留学という目的に考えられて 3・4 年生の受験者は少なくなります。

2 番目は、試験の結果に基づきレベルアップのための具体的な方策を学科全体の課題として組織的に取り組むことです。今までまだ具体的には取り組んでおりませんでした。今後は ITP の結果から学生に個別の課題を設定し、そのための的確な指導を教員側からも組織的に行う体制が必要ではないか

と考えております。現在は、1・2年生のクラス主任と3・4年生の演習担当教員にはそれぞれの学生の点数を把握してもらい、それを指導に活かしていただいています。また、リーディングスキルとLL演習の担当者にも学生の点数を把握してもらっています。ただ、スピーキングスキルクラスについては、多くのクラスを英語を母語とする非常勤講師の先生方に依存しておりますので、組織的な指導体制の確立が難しい点でもあり、今後の課題になると思います。

3つめの課題として、TOEFLの点数を所定科目の単位認定に利用する事例が他大学でもあるようですが、我々はその段階までは全く到達しておらず、それが有効な方策なのかという検討もしておりません。ただ積極的なTOEFLの導入の仕方として、単位認定としても導入することを今後の課題の一つに挙げております。

<Q&A>

Q1 「九州大学の志水と申します。ITPの英文科での実践例ということですが、他学部、他学科などの全学的な動きはどのようなのでしょうか。」

A1 「個人的に他学科の先生からも実施したいという声は聞きますが、今のところ外国語学科英語専攻以外は学科、学部として取り組もうという組織的な対応は聞きません。関連して、国際センター主催のITPの試験は、受験生69名中24名と約4分の1を英語専攻が占めております。先ほど英文科はほとんどいないといいましたが、英文学科の受験者は1人だけでした。他に多いところは、国際経済学科が11名、国際関係法学科が11名、文学部の中の国際文化学科から5名が受験しました。だいたい「国際」がつくところ、つまり英語に関心がある、外国の大学で勉強したい、それが自分の専門を活かすという学生が試験を受けて、できれば派遣交換留学生として行きたいと考えて受験しているようです。

西南学院大学英文学科でのTOEFL (ITP) テスト実施データ

資料 I

2002. 10. 18 作成

実施日	受験者実数		Section I 聴解力	Section II 表現力・文法の知識	Section III 読解力	Total
1999. 9. 28	108名	平均点	41.06	45.70	43.01	432.64
		標準偏差値				35.10
2000. 5. 27	100名	平均点	42.03	45.62	45.94	445.29
		標準偏差値	5.61	4.53	4.95	39.23
2000. 12. 9	90名	平均点	44.04	46.26	43.33	445.46
		標準偏差値	4.02	3.34	5.30	32.18
2001. 6. 9	135名	平均点	42.79	44.81	44.37	439.87
		標準偏差値	4.21	4.84	5.12	37.97

*	2001. 6. 16	国際センター 67名	平均点	46.48	48.40	47.52	474.67
			標準偏差値	4.24	3.92	4.70	33.67
	2001. 12. 8	139名	平均点	44.35	45.76	47.12	457.39
			標準偏差値	3.79	3.60	4.66	31.37
*	2001. 12. 8	英専 71名	平均点	47.46	47.77	49.17	481.35
			標準偏差値	4.88	4.29	5.79	42.23
	2002. 6. 19	169名	平均点	45.14	46.07	46.52	459.11
			標準偏差値	4.19	4.41	4.51	34.75
*参考データ			時間・点数の配分	50問/35分 31~68点	40問/25分 31~68点	50問/55分 31~67点	677点満点

資料説明

1999年のITPテスト導入初年度は1回の実施で、この年の平均点および標準偏差値は不明です。その後、年に2回、5月または6月と12月に実施しており、今年は、2002年6月19日に実施し、今度は12月4日に実施予定です。

資料において、初回の年の英文学科平均点が432.64点で、その後、毎年回を行うごとに微々たるものですが点数が上がってきています。2001年6月9日は前年に比べると6点ほど下がっています。しかし、その次の回の2001年12月8日に実施した際には大きな飛躍がありました。少しずつですが、全体の平均点は伸びてきているということです。今後、更に参考になる資料が収集できるのではないかと期待しています。

資料1で網掛けをした2つの箇所がありますが、これは国際センターが本学から海外の協定大学へ派遣する留学生を選考するために実施した試験です。受験は可能ですが、英文学科の学生はほとんど受けません。ITPは原則として公的な入学資格として使用できないことになっていますが、本学の協定校への留学では、協定校間の話し合いによりITPのスコアでの派遣が了承されておりますので、英文学科の学生は受験の回数が多いという有利な点があります。

下から2列目は外国語学科英語専攻のもので、西南の中でもっとも英語が強く、入学試験の英語平均点も外国語学科英語専攻と比べると英文学科が10点ほど低くなっております。面白いことに、平均点は2001年11月8日の英語専攻は481.35です。英文学科457.39と約24点の開きがあります。実はこの年の入試の点差は11点でした。入試で平均点の差が11点だったのがTOEFL-ITPでは24点も開きがある。色々考えられますが、英語専攻は1・2年生で徹底的に英語運用能力を鍛えられることに起因するのではないかと思います。英文学科は英語のみではなく、文学と文化の勉強もしますので、そちらにも力を出さなくてはいけないということが点数差にも表れているのではないかと考えます。

ただし、セクションIの聴解力(ヒアリング)の点数を見ましても、最初は41.06点だった全体の平均点が徐々に上がっており、2001年12月8日では44.35点になりました。平均点からの上下の幅を表す標準偏差を見ても半年で差が狭まっておりますので、全体としては聴解力が英文学科の学生としてはかなり力をつけてきているのではないかと思います。1年生は初めての受験である前期6月には戸惑いがある

りますが、それを考慮しても年 2 回の受験を続ける間に徐々に力をつけてきて点数は上がっています。参考までに、英語専攻は今まで年に 1 回の実施です。しかも最近始めたばかりで 12 月 4 日に行われます。どういう点数がでるか楽しみです。

資料 2 と資料 3 を簡単に説明しますと、これは英文科の学生で私の授業を受けている学生を対象にして、過去に ITP を受けた 2~4 年生にアンケート調査をした結果をまとめたものです。これらは、特にいいものを取り出したわけではありません。

A の学生については特に面白いことが言えます。この学生は 4 年生で、2002 年 6 月 19 日の交換留学からの帰国直後に TOEFL を受けると、自分でもびっくりするくらいに点数が上がったということでした。()内が個人のスコアですが、彼女の場合、留学前の 437 点から留学後には 580 点まで伸びました。特に注目すべき点はセクション I の聴解力が非常に著しく伸びていることです。つまり、英語を聞かざるを得ない環境や、その訓練がいかに ITP のセクション I (リスニングセクション)の点数を伸ばすのに必要かということです。それからセクション III の読解力が 45 点から 56 点と約 11 点伸びています。留学先のアメリカの大学で、相当量のテキストを読まされたことも力をつけた要因ではないかと思います。その他の学生も、個人的に回を重ねるごとに点数が伸びてきております。

D の学生も、春休み語学研修後の 2002 年 6 月 19 日に受験したので少し成果が似ています。本学での大学主催語学研修はイギリスのケンブリッジ大学をはじめとして、アメリカ・カナダ・オーストラリアと研修先も増やしております。学生はこのような機会を使って英語圏の国で実地のトレーニングができることで、TOEFL-ITP の結果にその成果が出てきています。資料では、個人的にどのようなトレーニングをしているかということも参考にさせていただけるかと思います。

次の資料は、2~3 年生です。1 番下に英語専攻のケース 2 名を参考までに掲げております。交換留学のための TOEFL の基準点は、英文学科と英語専攻は 520 点です。2 年前までは 510 点でした。本当は 550 点以上くらいが理想的かと思いますが、協定校との取り決めにより手の届きやすいハードルに設定しております。他学部・学科は、協定校との話し合いで更に下げて 480 点にしています。

資料 3 は、少し古いデータですが 2000 年 12 月 9 日の実施の際にアンケートを取ったものです。受験者数 90 名のうち、テスト内容が難しかったという答えが 1 年生で 61 人と多く、リスニングが特に難しいという答えが目立ちました。セクション 3 のリーディングも難しかったようです。受験の動機は、ITP のスコアを伸ばして留学したいという受験生が多いです。今年は、スピーキングスキルクラスの他にリーディングも作りましたので、学生の力もより伸びることが期待されます。

さらに、自分はどのくらいの英語力があるのか確かめるために受験をする学生もおります。

TOEFL 受験と英文学科カリキュラムとの関係については、ほとんどの学生(全体の約 3 分の 2 の 60 人)が TOEFL に役立つ授業を行っていないと回答しております。特に必要なリスニング対策、強化を英文学科としてやってほしいという要望でもあるわけです。これを参考にして、2 年前に LL 演習を必修にし、特にリスニングの力をつけることに取り組んでおりますので、以前に比べると良くなっていくかなと思います。

TOEFL-ITP 導入事例(高等学校の部)

III. 高等学校の部

発表者: 関西創価中学校・高等学校 教諭 中西 均 氏

1. 関西創価高校の取組み

本校は、1973年4月に大阪府交野市に全日制普通科の創価女子高等学校として設立されました。ちょうど10周年を迎えた1982年に男女共学になり、校名も関西創価高等学校と変わりまして現在に至っています。昨年は春の全国高校野球甲子園大会にも大阪代表として出場するなど、クラブ活動も非常に盛んな学校です。

本校では1988年の4月から海外語学研修がスタートしました。系列の創価大学の分校がアメリカのロサンゼルスに開校したのを機に、中学2年生～高校3年生までの20名がロサンゼルス分校で語学研修を始めたのが最初です。それを発展的に解消し、1997年からはプレカレッジ語学研修として高校3年生の希望者40名が参加する語学研修プログラムを始めました。またその期間、他の3年生の生徒には「英語アドバンスセミナー」を開催し、創価大学のネイティブの先生方10数名を講師として招き、英語のトレーニングを3日間実施しています。

2001年8月には、アメリカのロサンゼルス・オレンジカウンティに「アメリカ創価大学」が開学しました。本校ではこれを見据えて1998年からアメリカ創価大学進学希望者への補習授業を開始しました。2001年には高校2・3年生を対象に「総合文系Ⅱクラス」として、アメリカ創価大学はじめ海外の大学進学希望の生徒を対象としたクラスを設置いたしました。

(1) 兄弟校・系列校

東京に創価大学、ロサンゼルスにアメリカ創価大学、東京に創価高等学校・中学校・小学校、大阪に関西創価高等学校・中学校・小学校、札幌に創価幼稚園がございます。海外にも香港、シンガポール、マレーシアに創価幼稚園が開園しております。ブラジルには小学校と幼稚園があります。

(2) 交流校

海外交流も活発で、アメリカ・ロサンゼルスのアリソニゲール高校、サンフランシスコ国際学アカデミー高校、オーストラリアのアッシュクロフト高校、ノースミード高校、デンマークのアスコ高等国民学校、韓国のキョンヒ高校、また他にもケニアの学校などと派遣・受入など人物交流を含む交流活動をしております。

(3) 帰国子女

帰国子女の受入も積極的に行っていますが、受験倍率は非常に高く各学年10名程度として募集しております。これらの生徒はパイオニアグループとして、海外からの来賓来校時または生徒自身の語学研修時に活躍しております。

(4) 海外語学研修

プレハイスクール語学研修として、中学 2～3 年生の希望者 20 名と、プレカレッジ語学研修として高校 3 年生の 40 名が 3 学期にアメリカへ渡航するほか、オーストラリアでもアッシュクロフト高校・ノースミード高校との交流を中心に高校 2 年生の 10 名が夏休みに研修を行います。そのほかにも、デンマークでの英語研修および現地のアスコー高等国民学校との交流で高校生 3 名が参加します。

(5) 英語研修

海外語学研修に参加するわずかな数では全校生徒のニーズに応えられませんので、校内での英語研修として「英語キャンプ」「English Weekend」「English Week」を実施しております。

「英語キャンプ」は、中学 3 年生と高校 1 年生を対象に、創価大学に学ぶ世界からの留学生を本校に招いて、1 泊 2 日すべて英語でコミュニケーションする体験をしてみようという企画です。当初は創価大学のネイティブの先生を招いて授業していただく内容でしたが、中学 3 年生と高校 1 年生では英語のレベルが異なりますので、授業をしてもちぐはぐな印象がありました。その反省から留学生との交流にしたところ、生徒には大好評で、キャンプが終わる頃には皆で肩を抱き合いながら涙して別れるという交流になっております。

「English Weekend」は、高校 2～3 年の希望者が 11 月と 2 月にオールイングリッシュの体験を 1 泊 2 日とするもので、本校の外国人講師を中心に行います。

「English Week」は文系Ⅱクラス(海外進学クラス)の高校 2～3 年生を対象に、毎学期の期末テスト終了後の 1 週間、2～3 日の合宿を含めたオールイングリッシュの体験を行うものです。朝から晩まで全く日本語をつけずに英語のみでトレーニングいたします。

(6) 海外進学クラス(文系Ⅱクラス)

本校の卒業生のうち、約 7 割は東京の創価大学もしくは創価女子短期大学に推薦入学します。その進路を希望する生徒を集めたクラスを文系Ⅰクラスとしています。

文系Ⅱクラスは英語改革を進めるクラスとして昨年から設置された、海外留学を進路として希望する生徒のみを集めたクラスです。進学先はアメリカ創価大学が中心ですが、中にはハーバード大学など海外の名門大学を目指す者もおります。カリキュラムは基本的には文系Ⅰクラスや国公立大学受験クラスと変わらず、国語や社会の授業は日本人教師が日本語で行います。英語の授業はオールイングリッシュで行いますが、それ以外にもできるだけ英語でのアウトプットに挑戦させようとホームルームや休み時間には生徒同士でも英語で話させるようにしています。

高校 2 年生の授業は、「英語Ⅱ」の授業が 4 時間、Oral Communication の授業を本校では「English Hour」と称しまして、オールイングリッシュの 2 時間を過ごさせています。この「英語Ⅱ」の 4 時間と「English Hour」の 2 時間は、文系Ⅰも含めて、全ての学年生にございます。このほかに、文系Ⅱクラスでは 2 年次に 7 時間授業を週 3 日設け、リスニング・グラマー・リーディングを各 1 時間、合計で週 3 時間の補習授業をしています。このうち 2 時間はネイティブの教員が担当します。

私の受け持つ 3 年生のクラスでは、リーダー 3 時間、ライティング 2 時間、English Hour 2 時間に加え、リスニングと Critical Thinking 各 1 時間の補習授業があります。

11 月・2 月の English Weekend、期末試験終了後の English Week で集中的に TOEFL について学習しますので、普段の授業と補習の中では TOEFL の内容は行いません。基本的には総合的な英語力をつ

けて TOEFL の点数も上げていく方針で進めています。また、TOEFL 受験準備の一環として、関西での TOEFL-CBT セミナー(CIEE 主催)にも積極的に参加しています。また英語の勉強だけではなく、クラブ活動や生徒会活動にも活発に取り組んでいます。

「語学と読書」を生徒育成の中心に置き、文系Ⅱクラスを突破口に英語改革にも着手しています。本校には世界的な文化人が毎年 10~30 組来校され、生徒との交流もごございます。有名な方ではゴルバチヨフ氏も来校されましたし、名だたる大学の学長・総長クラスの方々がお見えになります。これら一流の知識人や学者と触れる中で世界市民を育成するという大きな目標を掲げております。

2. TOEFL-ITP 導入

TOEFL-ITP は、1997 年に Level2(Pre-TOEFL)をプレカレッジ語学研修の選抜試験およびそのプレイスメントテストとして導入したのが最初です。また、1999 年からは全校の希望者を対象に、学期に一度の実施もしています。

この他に本校および東京の創価高校では、授業改革の成果をはかる目的から全校の統一テストも導入しております。以前の受験ベースの授業では、結果として誰も英語を話せないし、TOEFL を受けてもなかなか点数が上がらない状況でした。国公立進学クラスを除いては、受験英語から脱却して真の英語運用能力育成に取り組むために、授業改革を図ったわけです。その成果を測るバロメーターとして TOEFL・TOEIC を東西の創価高校がそれぞれ導入しました。東京の創価高校では全校の統一テストとして TOEFL-ITP を実施しています。本校では TOEIC を採用する予定でしたが、TOEIC はどうしてもビジネスの話も出てきますので、もう少し高校生レベルに合ったものをということでベネッセの英語コミュニケーション能力テストを利用しています。

文系Ⅱクラスでは、2 年生の各学期(6 月・11 月・2 月)に TOEFL-ITP を全員が受験します。

各回の平均点の目標として、6 月は 420 点以上、11 月は 460 点以上、2 月は 500 点以上を設定しました。実際には、6 月の平均点は 428 点で 500 点超の生徒は出ませんでした。11 月は平均 451 点で 500 点超の者が 6 人誕生しました。2 月には平均 473 点で 500 点超の生徒は 16 人に増えました。

Section1(リスニング)の平均も、42.8 点(6 月)から 47.6 点(2 月)と顕著に伸びましたが、これは朝夕のホームルームなどでネイティブの教員から英語のシャワーを浴びていることや、TOEFL の勉強が明確になったために取り組む教材もはっきりと定まり、生徒もそれによく挑戦したことなどが要因かと思えます。また、6 月のテストの結果を受けて 7 月の English Week 中に個人懇談も実施しております。生徒本人と担任に外国人講師を加えた三者で 20 分ずつの懇談を行ない、各個人の ITP の結果をもとにセクション毎の対策を立てて、課題を与えることを行いました。

高校 3 年生からは CBT(コンピューター版 TOEFL)の受験に切り替え、ITP は受験しません。CBT は 3 年生になる前の春休みにまず 1 回受験してみるようにと指導しています。全員受験はノルマではありませんが、1 学期中に 1 回、8 月の夏休み前に 1 回、11 月に 1 回ということで、全部で 3 回受験する予定で

す。

多くの生徒が目指すアメリカ創価大学の Early Admission の締切が 10 月 15 日ですので、1 学期中の受験で CBT の形式に慣れ、8 月の試験で結果が出せるよう取り組んでいます。8 月で 213 点(ペーパー版の 550 点)が取れない場合には 9 月にも受験します。1 月 15 日には Regular Admission の締切があるため、11 月の試験も 8 月と同様、締切まで 1 ヶ月の余裕を見て皆でチャレンジします。

1 学期中の受験でのクラス平均は 177 点(ペーパー版の 503 点)でした。173 点(ペーパー版の 500 点)を超えた生徒は 2 月の 16 人から 28 人に増えました。8 月の平均は 183 点(ペーパー版の 513 点)で、173 点を超えたのは 46 人中 34 人です。その中で 12 名が無事に目標の 213 点(ペーパー版の 550 点)を超え、晴れて Early Admission に出願することができました。

以上は、文系Ⅱクラスの取り組みですが、他のクラスの生徒も英検に代わる英語力判定の指標として TOEFL を受けるようになってまいりました。1 点の差で合格・不合格と決められてしまうのではなく、自分の英語力がどの程度上がったかを点数で見て励みとしたい、また大学入学後に留学するためにある程度勉強しておきたいというニーズから、文系Ⅰの生徒も英語力向上の物差しとして ITP を受験しています。多い時で 200 数十名、少ない時でも 50 名前後が常に ITP を受験するという形になっています。

3. 成果

文系Ⅱクラスが中心になりますが、TOEFL の学習を通じて、アメリカを中心に他国の歴史、文化など様々な分野の知識が非常に広がったことがまず成果として挙げられます。

2 つめは、生徒の留学への意識が高くなり、TOEFL をきっかけに英語学習にも主体的に取り組むようになりました。本校のカリキュラム編成上、文系Ⅰクラスではライティングの授業は高校 3 年生からになりますが、生徒の中には TOEFL のライティングを教材に、参考書を買って自発的に勉強するなどしており、この点において非常に良かったと思っています。

3 つめとして英語力向上の度合いが定期的に測れることで持続的に学習できます。テストの度に点数が上下して一喜一憂したりもしますが、次の目標を立てて生徒は勉強していくことができます。

4 つめにはリスニング力が飛躍的に向上しました。2 年生の最初の頃は外国人講師のジョークも聞き取れずに、クラスでも私しか笑っていない状況でしたが、今は私が聞き逃しても、それを聞いて生徒は笑っているという状況です。ホームルームの時間にもスピーキングのトレーニングとして、テロ事件以降平和についての自分自身のメッセージをクラスの中で発表するなどしております。

最後に、校内で実施できること、また約 3000 円という費用的なことについても、高校 2 年生中心とした ITP の受験は有効ではないかと思えます。最終的には CBT を受験しなければなりません、実際に CBT の受験料は為替レートによっては 15,000 円近くなり、生徒は負担を感じながら受験しております。その点においても ITP は非常に有効かと感じております。

<Q&A>

Q1: 試験の費用は学校側負担か、生徒個人負担か、どちらでしょうか。

A1: すべて生徒の自己負担です。統一試験として行う東京の創価高校の TOEFL-ITP および本校の英

語コミュニケーション能力テストは全校生徒対象ですので学校負担で行っておりますが、本校の ITP は、私の担任する留学希望者の文系Ⅱクラスの生徒を中心とした希望者受験として実施しております。費用は個人負担となります。

Q2: 実際の「英語Ⅱ」の授業、English Hour、補習授業ではどのようなテキストを使っておられるのでしょうか。

A2: 基本的なカリキュラムは文系Ⅰ・Ⅱクラス共通ですので、同じ教科書を使っております。文系Ⅱクラスだけ特別にレベルの高い教科書を使っているわけではありません。

「英語Ⅱ」の内容も進度も同じですが、実は文系Ⅱクラスの場合は、他のクラスで 4 時間かける内容を 3 時間で行ない、残りの 1 時間は補習の内容にあてています。

「英語Ⅱ」の教科書としては、現在は「POLESTAR」という標準よりやや難しい程度のものを使っています。

English Hour の 2 時間は、総合的な授業として講座の選択が可能になっています。昔は 15~16 人を 1 クラスとして英会話の授業を行っていましたが、それから発展して外国人講師も日本人教師もそれぞれの課題を英語で行う授業をすることにしました。生徒は自分の興味にもとづき、希望の授業を選ぶことができます。例えば 3 年生であれば、月曜日の 5・6 時間目が English Hour になりますが、5 時間目は「映画を通じた英会話」、6 時間目は「TOEIC 対策」など、それぞれ別の授業内容を選ぶことができます。

高校 2 年の 3 時間の補習授業では、「インターアクション」というマグローヒル社の教科書を使いました。以前は文法もリーディングも英会話も内容がバラバラで全くリンクしていなかったことが一番の問題でしたので、それをなるべくリンクさせて、出てくる単語や熟語、文法など同じ内容で一斉に授業できないかと思っておりました。いつも半年以上前に教科書が決まっていたので、なかなか実現できなかったのですが、英語改革の一環として試しにこの「英語Ⅱ」の補習授業でマグローヒルの教科書を使ってやってみたらどうかということで始めました。高校 3 年に入る前に同じくマグローヒル社の「モザイクⅠ」というレベルアップした教科書に変え、3 年次の 2 時間の補習授業(リスニング)で使っております。

リーディングについては、他クラスの 3 時間分の授業内容を 2 時間で進めて、残り 1 時間を補習分の内容にあて、同じ「モザイクⅠ」のリーディングの教科書を用いています。

ライティングの 2 時間も同様に、他クラスの内容は実際に生徒は 1 時間で終わってしまいますので、残り 1 時間を文法もしくはライティングにあて、外国人講師に担当してもらっています。

文系Ⅱクラスは、将来的には文系Ⅰクラスまでこのような改革を広げるクラスでもありますので、おそらく他の学校でも参考にして取り組んでいただくことも可能かと思えます。

Q3: 先程、国公立大学を受験するためのクラスではこのような試みはできないとお話されていたと思います。TOEFL と受験英語の関係はあるのでしょうか。

A3: 最初に英語改革をしようと英語科で話し合ったときのクラス構成は、国公立進学クラス、私立文系・理系クラス、創価大学への推薦クラスの 3 種類でした。ほとんどの生徒は創価大学への推薦クラスに進みますが、希望者の数に応じて 1~2 クラスは国公立進学クラスができます。そのクラスの中でも受験勉強の末に TOEFL を受けて 630 点を取った生徒もおります。英語科の教師の中にも、

受験ベースの勉強を一生懸命して最後に語学研修などをすれば TOEFL の点数も上がるのではないかと、また TOEFL や TOEIC も特にグラマーなどは基本を押さえた問題がよく出題されるので、センター試験対策にも良いのではという意見も出ました。

しかし、私たちの英語改革では、学校のクラスの中で英語が自在に飛び交い、英語で聞く・話すができる雰囲気のある英語クラスを作りたいということが一つの大きな目標でした。我が校の英語改革はそこから始まり、その流れの中での TOEFL の導入でしたので、学校としては国公立受験と全く切り離して考えております。国公立進学クラスについては、今までのノウハウの蓄積もありますし、いまのところその内容を変える予定はありません。今回の英語改革は、あくまでも創価大学およびアメリカ創価大学への進学希望者を対象とした英語改革として進めております。

以上

関西創価高校における TOEFL-ITP の活用事例

関西創価高等学校(大阪府交野市)

英語科 文系Ⅱクラス担当 中西 均

1. 関西創価高校について

- 1973年4月 創価女子高校として創立(全日制普通科)
- 1982年4月 関西創価高校に校名変更(男女共学校に移行)
- 1988年7月 海外語学研修スタート(中学2年～高校3年 20名)
- 1997年1月 プレカレッジ海外語学研修スタート(高校3年生希望者 40名)
英語アドバンスセミナー(創価大学進学希望者対象)
- 1998年～ アメリカ創価大学進学希望者への補習授業開始
- 2000年4月 TOEIC スタイルテスト導入(ベネッセ英語コミュニケーション能力テスト)
- 2001年～ 総合文系Ⅱクラス発足(海外留学を希望する生徒対象)高校2年、3年に設置
- 2001年8月 アメリカ創価大学開学

兄弟校、系列校

- 創価大学(東京)アメリカ創価大学(ロサンゼルス・オレンジカウンティ)
- 創価高校(東京)創価中学校(東京)創価小学校(東京)
- 関西創価中学校(大阪)関西創価小学校(大阪)札幌創価幼稚園(北海道)
- 香港創価幼稚園、シンガポール創価幼稚園、マレーシア創価幼稚園、ブラジル創価幼稚園

交流校

- アメリカ・ロサンゼルス・アリソニゲール高校、サンフランシスコ国際学アカデミー高校
- オーストラリア・アッシュクロフト高校、ノースミード高校
- デンマーク・アスコー高等国民学校、韓国・キョンヒ高校 など

帰国子女(パイオニアグループ 各学年 10名程度)

- アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、香港、マレーシア、インドネシア、インド、韓国、ベネズエラなど

海外語学研修

プレハイスクール語学研修: 中学2, 3年生 20名 3学期

オーストラリア語学研修: 高校2年生 10名 夏休み

デンマーク語学研修: 高校生3名 夏休み

プレカレッジ語学研修: 高校3年生 40名 3学期

英語研修

英語キャンプ 中学3年生 高校1年生 留学生との交流 9月1泊2日

English Weekend 高校2年、3年の希望者 11月、2月 オールイングリッシュ体験
English Week 高校2年、3年の文系Ⅱクラス 每学期期末テスト終了後の1週間

TOEFL-ITPの導入

1997年～ Pre-TOEFL をプレカレッジ海外語学研修参加者選抜試験として実施

1999年～ TOEFL-ITP を学期に1度実施

中学・学年5クラス 高校・学年8クラス 「語学と読書」を生徒育成の中心に
毎年、10組～30組の海外からの世界的な文化人が来校し、生徒と交流。一流の知識人、学者と触れ
る中で、世界市民を育成。

2. TOEFL-ITPの3つの利用

(ア) 授業改革の成果をはかる。(受験英語からの脱却を目指して)

創価高校 TOEFL-ITP(2001年～)

関西創価高校 TOEIC スタイル英語テスト(2001年～)

(ベネッセ英語コミュニケーション能力テスト)

(イ) 文系Ⅱクラス(海外留学を希望する生徒)の英語力をはかる

高校2年で進路別クラス編成

高校2年1学期(6月 目標 over 420→428)※over500→0人

2学期(11月 目標 over 460→451)※over500→6人

3学期(2月 目標 over 500→473)※over500→16人

	6月	11月	2月
Section.1	42.8	45.3	47.6
Section.2	43.5	45.3	48.3
Section.3	42.2	44.9	45.9

6月の結果を受けて、7月の English week 中に個人懇談

1人20分 生徒個人の課題と対策について 本人、外国人講師、英語科教師で

高校3年からCBT受験に切り替え

希望者は3年になる前の春休みに1回受験

全員受験(1学期中に1回、8月、11月)

Listening section についてはITPと違うので準備が必要

(ウ) 英検に代わる英語力判定の物差しとして

文系Ⅰの生徒も英語力アップの目標として利用

3. 文系Ⅱクラスについて

①英語改革の実験クラスと位置づけ

②カリキュラムは全日制普通科と同じであるため、授業は日本語。ホームルーム、休み時間は英語。英語の授業はオールイングリッシュ

③高2(英語Ⅱ4時間、EH2時間、+3時間の補習授業)

高3(Reader3時間、Writing2時間、EH2時間、+2時間の補習授業)

学期1回の English weekend 期末試験終了後の English week で集中 TOEFL 学習

⑥TOEFL-CBT セミナーの参加

⑦クラブ、生徒会活動は活発

4. TOEFLの学習を通して

①アメリカを中心とした歴史、文化など、様な分野の知識が広がった。

②留学の意識が高くなり、英語学習の具体的な取り組みが進んだ。

③英語力の向上が定期的に計れることで、持続的に学習できた。

④リスニング力が飛躍的に向上した。

⑤留学には、最終的にCBTでの受験となるが、校内で実施できることや費用的な面においても
高校2年生を中心とした、ITPの受験は非常に有効であると思われる。

国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部

(英語名称: Council on International Educational Exchange, 略称 CIEE)

世界はお互いに依存している一方で、文化的には多種多様に異なっています。その中で生きてゆくすべとして、国際理解を深め、知識を蓄え、スキル・能力を向上させる手助けをすることを CIEE は理念としています。1947年のニューヨーク本部設立以来、CIEE は非政府、非営利団体として、学生、社会人、教員を対象とした様々な国際交流プログラムを開発・運営してきました。今日では、世界30か国に400名以上のスタッフを擁し、世界で最も大きな国際交流団体の一つとなっています。1998年には、長年の活動実績が評価され、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)より、ユネスコと協力連携関係にある国際NGOとして承認されました。

日本では1965年に東京、1989年に京都、2002年に福岡に事務所を開設し、日本における国際交流の草分け的存在として36年にわたり各種国際交流プログラムを運営し、これまでに4万人余りの方々が参加しています。現在は、高校生、大学生を対象とした国際教育、体験、交流プログラムを中心としながら、新しい時代のニーズに応じて、海外で就業体験ができるインターンシップやサマージョブも提供しています。その他、将来を担う青少年の人材育成に関わる教員を対象とした海外研修の実施、政府より委託された国際交流に関する調査・研究、教員の派遣・受入プログラムへの協力など、活動は多岐にわたります。

また、1981年に、米国の非営利教育機関である ETS (Educational Testing Service 本部プリンストン)の委託を受けて以来、2000年9月まで英語能力判定試験の Paper-based TOEFL (Test of English as a Foreign Language) を日本で実施・運営しました。Computer-based TOEFL (CBT) が開始された2000年10月以降も、ETS テストの青山テストセンターの運営や、TOEFL-ITP の企画促進、業務を行うとともに、ETS テストの広報宣伝活動を実施しています。

【TOEFL 事業部からのお知らせ】

国際教育交換協議会 TOEFL 事業部では、TOEFL 日本事務局として下記の事業を行っております。ご質問、ご相談などございましたら、どうぞお気軽にお問い合わせください。

(詳しくはホームページ<http://www.cieej.or.jp>をご参照ください。)

- 英語教育、外部試験利用状況に関する調査研究活動
 - TOEFL 他 ETS 試験の広報宣伝活動:
 - TOEFL 受験一般に関するお問い合わせ対応
 - TOEFL-CBT セミナー(受験者対象)の実施
 - TOEFL、GRE、SAT、TSE の Bulletin(受験要綱)の配布
- ※ご希望の団体には 25 部単位で配布しております。(送料無料)
- TOEFL-ITP(団体向け TOEFL テストプログラム)の運営
 - ETS 発行の TOEFL 公式教材の販売取り扱い
 - ETS コンピューター青山テストセンターの運営(2003年5月30日まで)

【TOEFL メールマガジンのご案内】

2001年9月よりTOEFLの最新情報をE-mailにて提供する「TOEFLメールマガジン」をスタートいたしました。試験に関する最新情報はもちろん、TOEFLスコアやTOEFL-ITPの新しい活用事例、日本の国際教育に関する各界からのメッセージ、世界の英語教育事情などバラエティに富んだ内容を月1回無料でお届けしております。現在の購読会員数は、英語教育や国際理解教育にご興味のある大学・高校・企業関係者を中心に 1,000 名に上ります。購読をご希望の方は、TOEFL事業部までFAX(03-5467-2185)またはE-mail(toefl@cieej.or.jp)にてお申込みください。



国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部

TOEFL 事業部

住所: 〒150-8355

東京都渋谷区神宮前 5-53-67

コスモス青山ギャラリーフロア

電話: 03-5467-5477(広報チーム) FAX: 03-5467-7031

ホームページ: <http://www.cieej.or.jp>

【西日本オフィス】

住所: 〒606-8436

京都市左京区粟田口鳥居町 2-1

京都市国際交流会館 3 階

電話: 075-752-1130

FAX: 075-752-1131

【九州オフィス】

電話: 092-736-6740

FAX: 092-736-6741

本書に関しては、TOEFL 事業部 広報チームへお問い合わせください。

本資料内容の無断複製・複写・転載は禁じます。

2003 年 6 月 初版 発行

2003 年 12 月 改訂版 1 刷

2004 年 2 月 改訂版 2 刷

2004 年 12 月 改訂版 3 刷